# 『ニヤーヤ・ビンドゥ』第一章第一偈の研究
## —ダルモーッタラ釈とヴィニータデーヴァ釈—

繆　寿楽

## 1　序

仏教論理学の学匠ダルマキールティ（Dharmakīrti, ca. 600–660 CE）は Nyāyabindu の冒頭で「人間の目的のすべての遂行は正しい認識を先行要素とする。したがって、それ（正しい認識）を〔弟子に〕理解させる」（NB 1.1: samyagjñānapūrvikā sarvapuruṣārthasiddhir iti tad vyutpādyate //）と述べている[1]。作品の冒頭に書かれたこの一文は作品の基調を定める役割を持ち、この一文を分析することによって、Nyāyabindu という作品の主題や目的などを明らかにすることができる。

NB 1.1 に対する諸注釈のうち、ダルモーッタラ（Dharmottara, ca. 750–810 CE）は多くの点について、ヴィニータデーヴァ（Vinītadeva, ca. 700 CE）と異なる解釈をなしている。本稿は、両者の注釈を比較することを通じて、NB 1.1 に対する両注釈者の理解とその違いを明らかにしようとするものである。

## 2　Nyāyabindu の関連資料の紹介

ダルマキールティの七つの作品のうち、Nyāyabindu はダルマキールティの思想を学ぶための入門書として広く知られる作品であり、ダルマキールティの思想が簡潔に述べられている。そして、同作品及びその注釈に対する翻訳と研究は数多く存在する。

Nyāyabindu と関連する注釈及びその翻訳研究を以下の通りに提示する。その詳細を**略語及び参考文献**において提示する。

1. Nyāyabindupiṇḍārtha (Jinamitra)
2. Nyāyabinduṭīkā (Dharmottara)

   現代語訳として Stecherbatsky [1930]、渡辺 [1936]、木村 [1981]、中村 [1981] がある。
3. Nyāyabinduṭīkā (Vinītadeva)

   現代語訳として渡辺 [1970] がある。
4. Nyāyabindupūrvapakṣasaṃkṣipta (Kamalaśīla)

   現代語訳として戸崎 [1984] がある。

NB 1.1 と関連する先行研究について述べておく。沖氏は沖 [1986] と沖 [2000] において、NB 1.1 に対するダルモーッタラ注の一部及び他の注釈家の解釈を取り扱い、作品の構成要素などを分析している。

本稿は NB 1.1 に対するダルモーッタラとヴィニータデーヴァの両注釈を包括的に取り扱うものである。

---

[1] 訳はダルモーッタラの解釈に基づくものである。

## 3 構成

### 3.1 ダルモーッタラ注の構成

まず以下にダルモーッタラ注の構成を示す。

0 讃偈

1 作品の構成要素の考察

1.1「主題の目的」を述べること及びその必要性（NBṬD 5, 1; 7, 1-3; 8, 1-4）

1.2「主題」、「目的」と「作品と目的との繋がり」（saṃbandha）は NB 1.1 という文の意味によって理解される（NBṬD 9, 1; 10, 1-6）

1.3 目的と主題を示す語の提示及び両者（目的と主題）の考察（NBṬD 10, 6; 11, 1-6）

1.4 関係（saṃbandha）を示す語の非存在の提示及び関係の考察（NBṬD 12, 1-3）

2 主題などの言明に関する考察

2.1 プラマーナを持たない者に主題などを述べることに関する議論及び作者がそれら（主題など）を述べる合理性（NBṬD 13, 1-4; 14, 1-3）

2.2 「無益」と想定される場合の例示（NBṬD 14, 4-7）

2.3「有益」と考えられるのは主題などの言明によること及びそれ（「有益」という考え）も行動の要因であること（NBṬD 15 ,1; 16, 1-2）

3 正しい認識に関する考察

3.1 正しい認識（samyagjñāna）の定義（NBṬD 17,1 -3; 18, 1-2）

3.2 正しい認識の結果は対象理解（arthādhigati）であること及び正しい認識は未だ知られていないのものを対象とすること（NBṬD 19, 1-4）

3.3 知覚と推理は獲得可能な対象を示すので正しい認識であること（NBṬD 20, 1-3; 21, 1-3）

3.4 他の認識は獲得不可能な対象を示すので正しい認識ではないこと（NBṬD 22, 1-4; 23, 1-2）

3.5 正しい認識の考察（NBṬD 23, 2-4; 24, 1）

3.6 正しくない認識の対象である別の実在物の定義（NBṬD 25, 1-2）

3.7 正しくない認識の例示（NBṬD 25, 3-7）

3.8 示す時間と獲得時間が不一致であることの説明（NBṬD 26, 1-4）

4 NB 1.1 における各語の分析

4.1 pūrva の分析（NBṬD 27, 1-2; 28, 1-3; 29, 1-4）

4.2 puruṣārtha の分析（NBṬD 30, 1-5）

4.3 sarva の分析（NBṬD 31, 1-4; 32,1-4; 34, 1-2）

4.4 iti と tad の分析（NBṬD 34, 2-6）

4.5 vyutpādyate の分析及び四種の誤った理解の提示（NBṬD 34, 7; 35, 1）

### 3.2 ヴィニータデーヴァ注の構成

次にヴィニータデーヴァ注の構成を示す。

0 讃偈及び注釈の形式の説明

1 作品の構成要素の考察

1.1 「関係」、「目的」、「主題」を述べること（D 1b2-4; P 2a2-4）

1.2 三者（関係、目的、主題）を述べることは疑いを排除し、聞き手に意欲を生じさせるためであること（D 1b4-5; 2a1; P 2a4-6; 2b1-2）

1.3 直接に述べられるもの及び文意（sāmarthya）によって理解されるもの説明（D 2a1-3; P 2b2-4）

1.4 「主題」と「目的」を示す語及び「関係」の説明（D 2a3-5; 2b1-2; P 2b4-8; 3a1）

1.5 「目的の目的」に関する質問及び「目的の目的」の説明（D 2b2-3; P 3a1-3）

2 NB 1.1 の総義（D 2b3-5; P 3a3-5）

3 NB 1.1 における各語の考察

3.1 samyagjñāna の分析（D 2b5-7; P 3a5-8）

3.2 pūrva の分析（D 2b7; 3a1; P 3a8; 3b1）

3.3 sarvapuruṣārthasiddhi の分析（D 3a1-7; P 3b1-8）

3.4 iti と tad の分析（D 3a7; 3b1-2; P 4a1-3）

3.5 vyutpādyate の分析及び四種類の見解の例示（D 3b2-5; P 4a3-8）

## 4　分析

本節において、両注釈の分析を行う。本稿はダルモーッタラ釈を中心とするので、ダルモーッタラ釈の順序に従い、関連するヴィニータデーヴァ釈を言及する形をとる。

NB 1.1 の意味を簡単に把握するために、ヴィニータデーヴァの解釈に従って、NB 1.1 全体を提示する。

> 「正しい認識は人間の目的の完成に役立つものである。それゆえ、苦労して、それ (正しい認識) を遍知すべきである。そして、それ（正しい認識）を遍知することはこの論書から生じる。したがって、役立つものである正しい認識を遍知するためにこの論書を開始すべきと言われる」[2]

一方、ダルモーッタラは NBṬD において、明確に NB 1.1 の総義を示していないため、注釈全般を考察した後にダルモーッタラ注に基づいて NB 1.1 の総義を提示する。

### 4.1　作品の主題の目的の確定

周知の通り、作品の本体（śarīra）は二つある。「言葉」と「言葉の意味」である。そして「言葉」そのものの目的が考察されるべきではない。ダルモーッタラによれば、「言葉」は自らの表示対象（意味）を人に理解させることを目的とするからである[3]。

一方、「言葉の意味」の目的が考察される。そして、ダルモーッタラはダルマキールティがこの作品の価値を示すために NB 1.1 をもって Nyāyabindu という作品の「主題の目的」（abhidheyasya prayojanam）を説明していると考える。そして、それ（主題の目的）は人間の目的のすべての成就

[2]D 2b3-5; P 3a3-5 を見よ。

[3]NBṬD 5, 1; 7, 1-2 を見よ。

（sarvapuruṣārthasiddhi）である。主題が烏の歯のように目的を持たないならば、聞き手はこの作品に着目する（聴聞する）ことはない[4]。

一方、ヴィニータデーヴァは「人間のすべての目的の成就」（sarvapuruṣārthasiddhi）を「作品の目的の目的」（prayojanasya prayojanam）と解釈している。彼によれば、もし作品の目的の目的が説かれなければ、「正しい認識を遍知した（正しい認識を理解した）ところで、何にもならない、どこにおいても役立たたない」という疑問が生じる。「目的の目的」を述べることを通じて、上述した疑問が排除される。すなわち、正しい認識を理解することは人間のすべての目的の成就のためであり、それに役立つと彼は考える[5]。

ここで、目的（prayojana）という語は pra√yuj に ana 接辞（LyuṬ）をつけたもので、この場合、行為目的を意味すると考えられる。すなわち行為によって目指されるものを意味するであろう[6]。

そして、ダルモーッタラの解釈は次のように理解すべきである。すなわち、ものを正しく認識することによって人間の目的のすべての成就が期待される。一方、ヴィニータデーヴァの解釈は次のように理解すべきである。すなわち「正しい認識」そのものを知ることによって人間のすべての目的の成就が期待される。しかしながら、「正しい認識」を知ることは如何にして人間のすべての目的の成就を導くかが問題となる[7]。

上述した二つの解釈について、以下のことが考えられる。まず、後に説明されるように、ダルモーッタラは、聞き手が Nyāyabindu を全て学習するまで聞き手は正しい認識を持たないと考える[8]。したがって、ダルモーッタラにとって、この作品は「正しい認識」そのものを理解する手段というよりも正しい認識を獲得する（作品を学習することを通じて、本来持っていない正しい認識を持つようになる）手段に他ならない。それゆえ、人はこの作品を学習することによって、正しい認識を得て、ものを正しく認識する。一方、後に説明されるように、ヴィニータデーヴァは、人は異なる見解（誤ったもの）を排除することによって「正しい認識」を知ると考えている。したがって、彼は人が本来正しい認識と正しくない認識の両者をもっていると考えるであろう。そして、この作品を学習することによって、人は誤った理解を排除することができる。したがって、正しい認識だけが残り、人はものを正しく認識する（正しい認識）[9]。

---

[4]NBṬD 7, 3; 8, 1-4 を見よ。

[5]D 2b2-5; P 3a1-5 を見よ。

[6]A 3.3.115: lyuṭ ca / (Katre [1987: 303]: “[The kṛt 1.93 affixes 1.1 Kta 114] as well as (ca) LyuṬ are introduced [after 1.2 a verbal stem 1.91 to form a neuter action noun 114].”)

A 3.3.116: karmaṇi ca yena saṃspraśāt kartuḥ śarīrasukham / (Katre [1987: 304]: “[The kṛt 1.93 affix 1.1 LyuṬ 115 is introduced after 1.2 a verbal stem 1.91] co-occurring with [a nominal pada 1.4] fuctioning as its direct object (karmaṇ-i), contact with wich (yena saṃsprasāt) results in physical pleasure (śarīra-sukha-m) experienced by the agent (kar-uḥ).”)

A 3.3.117: karaṇādhikaraṇayos ca / (Katre [1987: 304]: “[The kṛt 1.93 affix 1.1 LyuṬ 115 is introduced after 1.2 a verbal stem 1.91] to denote an instrument (karaṇa-) or a locus(-adhi-karaṇa).”)

[7]sarvapuruṣārthasiddhi における sarva を、ダルモーッタラは siddhi にかけ、この複合語を人間の目的のすべての成就と解釈している。一方、ヴィニータデーヴァは sarva を artha にかけ、人間のすべての目的の成就と解釈している。

[8]NBṬD 13, 1-2: nanu ca prakaraṇaśravaṇāt prāg uktāny apy abhidheyādīni pramāṇābhāvāt prekṣāvadbhir na gṛhyante / tat kim etair ārambhapradeśa uktaiḥ /（「【反論】［この］著作を聴聞する前に、［たとえ］主題などが言われたとしても、〔主題などを〕正しく認識する手段（pramāna）は存在しないため、思慮ある者たちは〔主題などを〕受け入れることはない〔であろう〕。それゆえ、これら（主題など）が〔著作の〕冒頭部分に述べられたところで〔一体〕何になるのか」）という反論の前提である「正しく認識する手段がないため思慮あるものたちが主題などを受け入れることがない」という事実を受け入れた上で議論を展開している

[9]**4.11.5** を見よ。

### 4.2　主題、目的、関係の確定

ダルモーッタラは NB 1.1 という文が示されるとき、文の意味を通じて、「作品の主題」、「作品の目的」、「作品と目的の関係」が理解されると考える。彼によれば、「作品の主題」は正しい認識（samyagjñāna）、「作品の目的」は正しい認識が理解させられること（正しい認識を理解させること）、「作品と目的の関係」は手段と手段によってなされる目的の関係である[10]。ヴィニータデーヴァは「主題」を正しい認識、「目的」を「正しい認識を聞き手に理解させること」と明言し、「作品と目的の関係」を手段と目的の関係で解釈する[11]。

上述した四つの構成要素のうち、ダルモーッタラは「主題の目的」だけが NB 1.1 において直接に述べられるものであり、他の三者は NB 1.1 の意味を通じて理解されるものであると考える。それに対して、ヴィニータデーヴァはダルマキールティが NB 1.1 で直接に「作品の目的」、「主題」と「目的の目的」の三つを述べていると説明している。そして、「作品と目的の関係」だけが「それを理解させる」（tad vyutpādyate）という一文の意味（sāmarthya）によって理解されるものである。すなわち作者は正しい認識を明らかにする（理解させる）ためにこの論書を開始するので、NB 1.1 の意味から見て、この論書は他ならぬ手段である。もしそうでなければ、作者は手段ではないこの作品に対して、どうして行動すること（作品に着手すること）がありえようかというのが文の意味であると彼は考えている。彼はまた、「目的と作品の関係」を「結果と原因〔の関係〕」（kāryakāraṇa）、「所成と能成〔の関係〕」（sādhyasādhana）で言い換えている[12]。

既に上述したようにダルモーッタラは「主題の目的」だけが直接に述べられると考えている。そして、彼は tad が主題を表示する語であり、vyutpādyate が目的を表示する語であると説明している[13]。したがって、以下のことが考えられる。確かに tad という語は正しい認識（samyagjñāna）と結びついている。しかしながら、それもまた文の意味から理解される。tad という語だけでは作品の主題を直接に述べることができないからである。同様に vyutpādyate という語だけでは「作品の目的」を述べることもできない。

既に説明したようにダルモーッタラとヴィニータデーヴァは同じく作品の目的を「正しい認識を理解させること」と解釈している。そして、ヴィニータデーヴァは作品の目的は語り手が聞き手に正しい認識を理解させることと明言している[14]。ただし、ダルモーッタラは「正しい認識を理解させること」には二つの意味があると説明している。すなわち、語り手（ダルマキールティ）は聞き手（弟子）に正しい認識を理解させるためにこの作品に着手する。そして、聞き手（弟子）たちは、自身に正しい認識を理解させようとして作品に着手する[15]。

---

[10]NBṬD 9, 1; 10, 1-6 を見よ。

[11]D 2a3-5; P 2b4-7 を見よ。

[12]D 2b1-2; P 2b7-8; 3a1 を見よ。

[13]NBṬD 10, 6: tatra tad iti abhidheyapadam / vyutpādyata iti prayojanapadam / prayojanaṃ cātra vaktuḥ prakaraṇakaraṇavyāpārasya cintyate, śrotuś ca śravaṇavyāpārasya /（「そこ（NB 1.1）において、tad という語は主題〔を表示する〕語であり、vyutpādyate という語は目的〔を表示する〕語である。そして、この場合、「目的」は語り手が著作を書く働きの目的と聞き手が〔著作を〕聴聞する働きの目的〔の両方を意味する〕」）

[14]D 2a3-4; 2b1; P 2b4-6: ’dir yang dag pa’i shes pa bstan to zhes bya ba de ni brjod par bya ba yin no // yang dag pa’i shes pa bstan pa ni dgos pa yin no // yang dag pa’i shes pa bstan pa de ni khong du chung bar byed pa’i rang bzhin yin la / rab tu byed pa ’dis byed pas na rab tu byed pa ’di ni dgos pa de’i thabs yin no //（「そして、この場合（NB 1.1）において「正しい認識を教示する (bstan to)」というそれ (正しい認識) は主題である。そして、正しい認識を教示すること（bstan pa）は目的 (prayojana: dgos pa) である。そして、正しい認識を教示することは理解させる（khong du chud bar byed pa）を自性とし、論書は〔上述したことを〕するから、この論書はその目的の手段である」）

[15]NBṬD 10, 6; 11, 1-4-6; 12, 1-3 を見よ。

### 4.3 疑惑の働き

作品の冒頭（NB 1.1）で「作品の主題」などの構成要素を述べることについて、ダルモーッタラは次のような反論を想定する。「作品の主題」などがNyāyabinduの冒頭において述べられ、理解される際に聞き手はまだこの作品をすべて学習していないので、正しい認識を持たないはずである。したがって、「作品の主題」などが述べられるとしても、聞き手にとって、それらを正しく認識する手段はない。それゆえ、聞き手はそれら（主題など）を受け入れることはずはないのである[16]。

この反論に対して、ダルモーッタラは次のように説明している。彼はまず上述した「作品の主題」などに関する疑惑（反論）が妥当であると承認する。しかしながら、「主題などは有益である」という確定のみならず、「主題などは有益なのではないか」という疑惑も思慮ある者の行動の要因であると彼は説明している。したがって、作品の作者によって、主題などが述べられることは妥当であり、そして、それらが述べられる際に「主題などは有益なのではないか」という疑惑が生じ、その疑惑を通じて、人は行動する（作品を聴聞する）[17]。

一方、もし作者ではなくて、注釈家などによって主題などが述べられるならば、「主題などは無益なのではないか」という疑惑は生じるはずである。なぜなら、注釈家たちの言葉は時に遊びなどを目的としているからである。そして、「無益なのではないか」という疑惑は人が行動をやめる要因である。一方、作者は誤った主題を述べるはずも、実際にそのこと（誤った主題を述べること）を我々は経験したことがないからである。したがって、ダルマキールティ（作者）が作品の冒頭に「主題」などを述べることは適切である[18]。

### 4.4 疑惑の例示

ダルモーッタラは「作品の主題」などを述べる必要性を説明するために「無益なのではないか」という考え（saṃbhāvanā）を五つ例を用いて例示している。

1. 作品の主題は目的を持たない。烏の歯の考察のように。
2. 作品の主題は実行不可能である。「熱を取り除く竜王の頭部の宝石で装飾せよ」という教示のように。
3. 作品の主題は望ましくない目的を持つ。母の再婚の手順という教示のように。
4. 作品より簡単な目的達成の手段が存在する。
5. 作品は目的達成の手段ではない。

彼によれば、上述した五つのうち一つでも生じれば、聞き手は行動（作品の学習）をやめる。一方、作者によって、主題などが述べられるとき、「有益なのではないか」という疑惑だけが生じる。それゆえ、主題などを述べることは聞き手に「有益なのではないか」という疑惑を持たらすためである[19]。

一方、ヴィニータデーヴァによれば、「作品の主題」などを述べることはそれぞれ「主題が存在しないのではないか」、「作品の結果が存在しないのではないか」、「作品は目的のための手段ではないのではないか」などの疑いを排除するためであり、すなわち聞き手に「主題」などの存在を

[16]NBṬD 13, 1-2 を見よ。

[17]NBṬD 13, 4; 14, 1 を見よ。

[18]NBṬD14, 1-3 を見よ。

[19]NBṬD 14, 4-7; 15, 1; 16, 1-2 を見よ。

示すためである。また、「関係」などを述べることが聞き手に意欲を生じさせるためであると彼は考える。一方、「無益なのではないか」という疑惑に彼は言及していない[20]。

### 4.5　小結

文の構成要素について、ヴィニータデーヴァの考えを整理すれば以下の通りである。

- NB 1.1 によって「作品と目的の関係」、「作品の目的」、「作品の主題」と「作品の目的の目的」が理解される。「作品の目的」は正しい認識を理解させることであり、「作品の主題」は正しい認識である。
- NB 1.1 において直接に述べらているのは「作品の目的」、「作品の主題」と「作品の目的の目的」である。「関係」は NB 1.1 という文の意味によって理解される。
- 「主題」などを述べることは疑いを排除し、聞き手に意欲を生じさせるためである。
- 作品と目的の関係とは能成と所成の関係、能作と所作の関係、手段と手段によってなされる目的の関係である。
- 「目的の目的」は人間のすべての目的の成就であり、すなわち「正しい認識」を理解すること（目的）によって人間のすべての目的の遂行（目的の目的）が期待されるということである。

ダルモーッタラの考えを整理すれば以下の通りである。

- NB 1.1 によって、「作品と目的の関係」「作品の目的」「作品の主題」「作品の主題の目的」が理解される。「作品の目的」は語り手の目的と聞き手の目的の両者を意味し、すなわち正しい認識を理解させることである。「作品の主題」は正しい認識である。
- NB 1.1 において直接に述べられるものは「作品の主題の目的」のみである。他の三者は意味（主題の目的を述べる文脈の意味）によって理解される。
- 「主題」などを述べるのは、聞き手に「主題などは有益なのではないか」という疑惑を生じさせ、行動させるためである。
- 作品と目的の関係とは手段と手段によってなされる目的の関係である。
- 「主題の目的」は人間の目的のすべての成就であり、すなわちものを正しく認識すること（正しい認識）によって人間の目的のすべての遂行が期待されるということである。

### 4.6　正しい認識の定義

Nyāyabindu という作品の主題である正しい認識（samyagjñāna）の定義をダルモーッタラは次のように述べている。彼は「正しい認識」を「欺かない（avisaṃvādaka）認識」と解釈している。「欺かない」という語を説明するために彼はまず「欺かない者」を説明している。世間において、ある者は自分が以前に示した対象を人に獲得させるならば、我々はその者を欺かない者と呼ぶ。そして、それと同様に認識の場合においても、ある認識は自分が以前に示した対象を人に獲得させるならば、我々はその認識を欺かない認識と呼ぶ[21]。彼は「獲得させること」を「行動させること」

[20] D 1b4-5; 2a1; P 2a4-6; 2b1-2 を見よ。

[21] NBṬ$_{D}$ 17, 1-3; 18, 1: avisaṃvādakaṃ jñānaṃ samyagjñānam / loke ca pūrvam upadarśitam arthaṃ prāpayan saṃvādaka ucyate / tadvaj jñānam api svayaṃ pradarśitam arthaṃ prāpayat saṃvādakam ucyate / pradarśite cārthe pravarttakatvam eva prāpakatvam , nānyat / tathā hi na jñānaṃ janayad arthaṃ prāpayati / api tv arthe puruṣaṃ pravarttayat prāpayaty artham /（「『正しい認識』（samyagjñāna）は欺かない認識である。そして、世間において〔ある者は自分が〕以前に示した対象を〔人に〕獲得させるならば、〔その者は〕欺かない〔者〕と呼ばれ

で言い換えている。また、「行動させること」が正しい対象を示すことに他ならないと彼は説明している。したがって、彼は「獲得行為」に着目せず、「正しい対象を示すこと」に注目している。そして、人に行動させる（獲得させる）、すなわち人に獲得可能な対象を示すことこそが「欺かない」という語の定義であるということを強調している。

「欺かない」という語は一般的に次のように理解される。すなわちある者は以前にある対象を示す。そして、我々がその示された対象を確かに獲得したならば、その者は「欺かない者」であると我々は考える。一方、もしその対象を我々が獲得できなければ、その者は「欺く者」であると我々は考える。しかしながら、たとえその者が正しい対象を示したとしても、我々は自身の能力不足あるいは他のものの妨害などにより、最終的にはその対象を獲得できないということも想定される。したがって、ダルモーッタラは「獲得させた」を判断基準とせず、「示すこと」に注目している。そして、ある者（あるいは認識）は正しい対象、すなわち後に説明される獲得可能な対象を示すならば、その者（あるいは認識）は欺かない者（あるいは認識）である。したがって、ダルモーッタラは「正しい対象（獲得可能な対象）を示すこと」を欺かないか否かの判断基準としている。そして、上述したことを説明するために、彼は次のように述べる。

> NBṬD 18, 1-2: pravarttakatvam api pravṛttiviṣayapradarśakatvam eva / na hi puruṣaṃ haṭhāt pravartayituṃ śaknoti vijñānam /
>
> 〔人に〕行動させることもまた〔人に〕行動対象を示すことに他ならない。なぜなら、認識は強制的に人を行動させることのできないものからである。

なぜなら、正しい認識手段（pramāṇa）、すなわち正しい認識（samyagjñāna）の結果は対象理解（arthādhigati）であり、正しい認識の働きは対象理解の段階で終わるからである[22]。したがって、正しい認識は未だ理解されていないものを対象とし、既に理解されているものを対象とする認識は正しい認識ではない[23]。

ヴィニータデーヴァもまた「正しい認識」を「欺かない認識」と解釈している。しかしながら、彼は「欺かない認識」を「目的実現に対して欺かない認識」と解している。「目的実現」を彼の文脈から見れば、後に説明される「獲得されるべき対象を獲得すること」などと対応すると考えられる[24]。したがって、ダルモーッタラとは違って、彼は「欺かない認識」の判断基準を「対象を獲得すること」などとしている[25]。

---

る。それと同様に、認識もまた、〔ある認識は自分が〕以前に示した対象を〔人に〕獲得させるならば、〔その認識は〕欺かない〔認識〕と呼ばれる。そして、〔自ら〕示した対象を〔人に〕獲得させることは〔示した対象を人に〕行動させることに他ならない。すなわち、認識は対象を生じさせ、〔人に〕獲得させるのではない。そうではなくて、〔認識は〕人を対象に向かって行動させるから、〔認識は人に〕対象を獲得させる〔という意味である〕」）

[22]NBṬD 19, 1-2: ata eva ca arthādhigatir eva pramāṇaphalam / adhigate cārthe pravartitaḥ puruṣaḥ prāpitaś ca arthaḥ / tathā ca sati arthādhigamāt samāptaḥ pramāṇavyāpāraḥ /（「そして、まさにこれ故、正しい認識手段の結果（pramāṇaphala）は対象理解（arthādhigati）に他ならない。そして、対象が理解されるとき、人は行動させられ、そして対象が獲得される。そして、こうして、正しい認識手段の働き（pramāṇavyāpāra）は対象理解で終わる」）

[23]NBṬD 19, 2-4 を見よ。

[24]「獲得されるべき対象を獲得すること」、「放棄されるべき対象を放棄すること」及び「無視されるべきものに対して無関心であること」の三つである。

[25]D 2a5-7; P 3a5-8 を見よ。

### 4.7　知覚と推理が正しい認識である理由

正しい認識は二種ある。知覚と推理である。上述したように正しい認識は人に正しい対象を示す認識である。知覚と推理は次のように対象を示す。ダルモーッタラによれば、対象が見られることによって認識されるならば、その対象は知覚によって行動の対象として示される。一方、推理は証因である対象を知覚することを通じて、行動対象（獲得対象＝所証）の存在を確定する。推理はそのように行動の対象を示す。そして、ダルモーッタラによれば、知覚と推理は時間、空間に限定された対象を示し、そのような対象がまさに獲得可能な対象である。したがって、知覚と推理は獲得可能な対象（正しい対象＝時間、空間に限定された対象）を示し、人に獲得させるものであるので、正しい認識に他ならない[26]。

### 4.8　正しくない認識の例示

上述したように、知覚と推理は時間、空間に限定された獲得可能な対象を示すので、まさに正しい認識である。一方、他の認識は獲得不可能な対象を示すので、正しい認識ではない。ダルモーッタラは正しくない認識を例示している[27]。

1. 一部の認識は完全に虚偽なる対象を示す。その対象は例えば蜃気楼における水である。蜃気楼における水は存在しないので、獲得不可能な対象である。
2. 一部の認識は存在にも、非存在にも限定されていないものを示す。それは例えば、疑惑の対象である。存在、非存在の両方とも結びつく対象は世間において存在しないから、獲得不可能な対象である。
3. 証因に基づかないすべての概念知は制限をなすもの（証因）を考察せず働くのであるから、存在にも非存在にも限定されていない対象を示す。そして、そのような対象は獲得不可能な対象である。

上述した認識とは違って、知覚と推理は目的実現に対する能力を持つ実在物（arthakriyāsamartha-vastu）を獲得する原因であるので、Nyāyabindu において考察される[28]。

### 4.9　正しい認識の対象とは別の対象に対する認識の例示

正しい認識によって示されている対象とは異なる別の対象（anyad vastu）を対象とする認識はその正しい対象に対して正しい認識ではない。それを説明するためにダルモーッタラはまず正しい認識によって示される対象とは異なる対象の定義を説明している。彼によれば、別の実在物は正しい認識によって示された実在物と矛盾する属性と結びつくので、別の実在物と呼ばれる。そして、矛盾する属性と結びつくということは、正しい認識によって示された実在物と場所、時間、形象を異にするということである[29]。

ダルモーッタラは「別の対象に対する認識」を次のように例示している[30]。

1. 「黄色い巻き貝（形象を異にする別の実在物）」と把握している認識は白い巻き貝（正しい対象）に対して正しい認識ではない。

---

[26]NBṬD 20, 1-3; 21, 1-3 を見よ。

[27]NBṬD 22, 1-4; 23, 1-2 を見よ。

[28]NBṬD 23, 2-4; 24, 1 を見よ。

[29]NBṬD 25, 1-2 を見よ。

[30]NBṬD 25, 3-7 を見よ。

2. 鍵の穴のところにある宝石の輝きに対して、「鍵の穴にある宝石（場所を異にする別の実在物）」と把握している認識は実際に室内に存在する宝石（正しい対象）に対して正しい認識ではない。
3. 「正午の時間に存在する実在物（時間を異にする実在物）」と把握している夢（認識）は実際に深夜の時間に存在する実在物（正しい対象）に対して正しい認識ではない。

### 4.10 示す時間と獲得時間の不一致

時間の限定について、ダルモーッタラは次のような反論を想定している[31]。形象と場所に限定された実在物は獲得可能である。しかしながら、時間に限定された実在物は獲得不可能である。なぜなら、対象を獲得する時間と正しい認識によって対象を示す時間は異なるからである。上述した反論に対して、ダルモーッタラはまず対象獲得の時間と対象を示す時間が異なるということを承認する。しかしながら、彼は自分が「対象が示されたその時間において、対象が獲得されるべきである」と述べていないことを強調する。時間に限定された対象は獲得可能な対象である。なぜなら、別の時間においてその対象が獲得され、そして、連続体に存する同一性（santānagatam ekatvam）に基づいて、両者（示された時間に存する対象と獲得された時間に存する対象）が同一であると我々は判断するからである。

### 4.11 NB 1.1 の語の分析

本節において、ダルモーッタラによる NB 1.1 における各語の分析を整理する。

#### 4.11.1 pūrva の分析

ダルモーッタラはまず NB 1.1 における「先行要素」（pūrva）を次のように解釈する。彼によれば、原因は結果より先に存在するので、NB 1.1 における「先行要素」という語は原因を意味する。しかしながら、原因には二種ある。直接原因と間接原因である。そして、ダルマキールティが NB 1.1 において、原因（kāraṇa）という語を使用せず、「先行要素」という語を使用していることは次のような理由があると彼は説明している。彼によれば、もし、「先行要素」ではなく、ダルマキールティが「原因」という語を使用すれば、「正しい認識は人間の目的のすべての遂行（sarvapuruṣārthasiddhi）の直接原因（sākṣātkāraṇa）である」と聞き手は理解する。しかしながら、二種の正しい認識のうち、推理は人間の目的のすべての完成の直接原因ではなくて、単なる先行要素であるので、ダルマキールティは「先行要素」という語を使用している[32]。その理由は以下の通りである。ダルモーッタラによれば、知覚は目的実現の顕現を有するものである。そして、推理は目的実現に対する能力のある対象に対して人に行動させるものであり、推理を通じて、人は次のように対象を獲得するのである。まず、推理が起こる、そして以前に知覚されたものの想起が起こる。その想起を通じて、欲求が起こる。欲求を通じて、人は行動する。最後に行動を通じて、人は対象を獲得する。しかしながら、既に上述したように正しい認識の結果は対象理解であるので、推理は単なる先行要

[31] NBṬD 26, 1-4 を見よ。

[32] NBṬD 27, 1-2: samyagjñānaṃ pūrvaṃ kāraṇaṃ yasyāḥ sā tathoktā / kāryāt pūrvaṃ bhavat kāraṇaṃ pūrvam uktaṃ / kāraṇaśabdopādāne tu puruṣārthasiddheḥ sākṣātkāraṇaṃ gamyeta / pūrvaśabde tu pūrvamātram /（「先行要素（pūrva）は原因（kāraṇa）を意味し、正しい認識を先行要素（原因）とするもの（人間の目的のすべての遂行）はそのように表示される。結果より先に存在するから、原因は「先行要素」といわれる。しかし、「原因」（kāraṇa）という語が述べられるとき、〔正しい認識は〕人間の目的の遂行の直接原因（sākṣātkāraṇa）と理解されるであろう。一方、「先行要素」という語が〔述べられるとき、正しい認識は人間の目的の遂行の〕単なる先行要素〔と理解されるであろう〕」）

素である[33]。そして、知覚の場合において、知覚（目的実現の顕現を有する認識）が生じるとき、人の目的は成就される（puruṣārthaḥ siddhiḥ）ので、知覚は人間の目的の成就の原因である。たとえその過程を分析することが不可能としても、人は知覚に対して懸念を持たない。目的が成就されたからである[34]。

ヴィニータデーヴァは因が果より前に存在するということに基づいて、「先行要素」（pūrva）を「原因」と解釈している。ただし、彼は「先行要素」と「原因」の違い及びダルマキールティが「先行要素」という語を使用する意図を検討していない。したがって、正しい認識が人間のすべての目的の成就（sarvapuruṣārthasiddhi）の原因であると彼は考えるであろう[35]。

### 4.11.2　puruṣārthasiddhi の分析

続いて、ダルモーッタラは「人間の目的」（puruṣārtha）を検討する。彼によれば、「目的」（artha）という語は √arth から派生する、行為目的を意味する語であり、求められるものを意味する語である。目的には二種ある。すなわち放棄されるべき目的と獲得されるべき目的である。一方、ヴィニータデーヴァは目的（artha）を三種に分類する。「放棄されるべき目的」、「獲得されるべき目的」と「無関心な目的」である。ダルモーッタラはヴィニータデーヴァの言う「無視されるべきもの」を「放棄されるべき対象」であると考える。puruṣārthasiddhi について、ダルモーッタラによれば、放棄されるべき目的の成就はすなわちそれ（放棄されるべき目的）を放棄することであり、獲得されるべき目的の成就はそれ（獲得されるべき目的）を獲得することである。そして、成就（siddhi）には二種ある。すなわち原因を根拠とする「発生」（utpatti）と認識を根拠とする「遂行」（anuṣṭhāna）であるとダルモーッタラは述べている。そして、NB 1.1 における「成就」（siddhi）という語は遂行を意味すると彼は説明している[36]。

### 4.11.3　sarva の分析

ダルモーッタラは「すべて」（sarva）という語を成就（遂行：siddhi）にかけ、「すべて」が種類の総体を意味せず、個体の総体を意味すると述べている。この場合、「種類の総体」は獲得されるべき目的を獲得することと放棄されるべき目的を放棄することという二種類の成就の全体を意味すると考えられる。ただし、ダルモーッタラは「そして、放棄されるべき対象と獲得されるべき対象以外の第三者は存在しない」と明言しているので[37]、個体の総体と種類の総体の間に区別は存

---

[33]NBṬD 28, 1-4: dvividhaṃ ca samyagjñānaṃ arthakriyānirbhāsam arthakriyāsamarthe ca pravartakam / tayor madhye yat pravartakaṃ tad iha parīkṣyate / tac ca pūrvamātram / na tu sākṣātkāraṇam / samyagjñāne hi sati pūrvadṛṣṭasmaraṇam / smaraṇād abhilāṣaḥ / abhilāṣāt pravṛttiḥ pravṛtteś ca prāptiḥ / tato na sākṣāddhetuḥ /（「そして、正しい知には二種ある。「目的実現の顕現を有するもの」と「目的実現に対する能力のある〔対象〕に対して、〔人に〕行動させるものである。その二者のうち、〔目的実現に対する能力のある〔対象に対して人に〕行動させるもの、それがここにおいて考察される。そして、それ（行動させる認識）は単なる先行要素であり、直接原因ではない。実に〔この種類の〕正しい認識が起こるとき、以前に知覚されたものの想起〔が起こる〕。想起を通じて、欲求〔が起こる〕。欲求を通じて、行動〔が起こる〕。そして行動を通じて、〔対象を〕獲得すること〔が起こる〕。それゆえ、〔この種の認識は〕直接原因ではない」）

[34]NBṬD 29, 1-4 を見よ。

[35]D 2b7; 3a1; P 3a8; 3b1: gang la yang dag pa’i shes pa sngon du ’gro ba yin pa ni yang dag pa’i shes pa sngon du ’gro ba can no // sngon gyi sgras ni ’di rgyu yin par brjod de gang gi phyir ’bras bu bas rgyu sva ba de’i phyir de sngon du zhes brjod de yang dag pa’i shes pa’i rgyu can zhes bya ba’i tha tshig go //（「あるものに対して、正しい認識は先行要素であるから、〔それは〕正しい認識を先行要素として持つ〔ものである〕(pūrvikā)。この「先行」という語は原因を言う。なぜなら、結果に原因は先行するからである。それゆえ「それが先行する」と言う。それ (tad) は正しい認識を因としているという意味である」）

[36]NBṬD 30, 1-5 を見よ。

[37]NBṬD 30, 3: na ca heyopādeyābhyām anyo rāśir asti /

在しないはずである。それにもかかわらず、ダルモーッタラが個体の総体を強調することは成就と正しい認識の間の必然関係を示すためであろう[38]。その必然性を示すためにダルモーッタラは次のことを述べる。錯誤知（正しい認識とは別の認識）によって、たとえ偶然であっても、人間の目的の成就は起こらない。なぜなら、別の認識（錯誤知）は獲得不可能な対象を示すので、それらは目的の成就の原因ではないからである[39]。そして、ヴィニータデーヴァもまた「すべて」という語を必然性を示す語と考えている[40]。

一方、ヴィニータデーヴァは「すべて」という語を「目的」（artha）という語にかけ、人間のすべての目的を意味すると考える。そして、「すべて」という語が近いと遠い、また世間的と出世間的、また放棄されるべきものと獲得されるべきものと無視されるべきものを意味すると彼は説明している[41]。彼によれば、「近い」とは近い場所に存在するものであり、「遠い」とは遠い場所に存在するものである。「世間的」とは輪廻所摂 (saṃsārāntargata) であり、「出世間的」とは涅槃 (nirvāṇa) のことである。「放棄されるべきもの」とは期待されないものであり、蛇、棘、毒と剣などのものを意味する。「獲得されるべきもの」とは期待されるものであり、華蔓、栴檀、衣、食、飲、臥具と坐具などのものを意味する。そして、「期待されるもの」と「期待されないもの」のどちらでもないものは「無視されるべきもの」である[42]。この場合、彼の説明において矛盾が起こる。彼は「人間の目的、それらすべての原因は正しい認識であり」の直後に「すなわち知覚などの認識によって認識されるから武器と毒と棘などをすべて放棄する。華蔓などを獲得する。それら (獲得されるべきものと放棄されるべきもの) 以外のものに対しては無関心である」と述べている[43]。しかしながら、上述したように彼は「目的」（artha）を蛇、衣などの「モノ」として解釈している。それゆえ、人間の目的（例えば、蛇と武器）の原因は正しい認識であるという不合理な結論が出るはずである。一方、後半部を分析すれば、ヴィニータデーヴァが「獲得されるべき目的を獲得すること」と「放棄されるべき目的を放棄すること」と「無関心な目的に対して無視する」の三つを「人

---

[38]NBṬD 31, 1-4: sarvā cāsau puruṣārthasiddhiś ceti / sarvaśabda iha dravyakārtsnye vṛttaḥ, na tu prakārakārtsnye / tato nāyam arthaḥ—dviprakārāpi siddhiḥ samyagjñānanibandhanaiveti / api tv ayam arthaḥ—yā kācit siddhiḥ sā sarvā kṛtsnaivāsau samyagjñānanibandhaneti / mithyājñānād dhi kākatālīyāpi nāsty arthasiddhiḥ /（「sarvapuruṣārthasiddhi は sarva と puruṣārthasiddhir からなる karmadhāraya であり、人間の目的の全ての成就を意味する。この〔NB 1.1 における〕sarva という語は実体の総体を意味しているのであって、様態の総体を意味するのではない。それゆえ、〔NB 1.1 は〕次のことを意味するのではない—二種類の「成就」の両方とも必ず正しい認識を根拠とする。そうではなくて、およそ成就（siddhi）であれ、これはまさにそのすべて正しい認識を根拠とする。なぜなら、錯誤知によって〔たとえ〕偶然であっても目的の成就〔が起こることは〕ないからである」）

[39]NBṬD 31, 4; 32, 1-4; 34, 1-2 を見よ。

[40]D3a, 6-7; P 3b, 7-8 を見よ。

[41]D 3a1-3; P 3b1-3: skyes bu’i don thams cad ’grub pa zhes bya ba ni skyes bu’i don yin pas na skyes bu’i don to // don zhes bya ba’i sgras ni dgos pa yin par brjod de skyes bu’i dgos pa zhes bya ba’i tha tshig go // de ni thams cad kyang yin pa skyes bu’i don yang yin pas skyes bu’i don thams cad de thams cad ces bya ba ni thag nye ba dang / rgyang ring ba dang / de bzhin du ’jig rten pa dang / ’jig rten las ’das pa dang / de bzhin du dor bar bya ba dang / blang bar bya ba dang; btang snyoms su bya ba’o //（「「人間のすべての目的の完成」について。人間の目的すなわち人間の目的を意味する (puruṣasya arthaḥ puruṣārthaḥ)。目的という語は目的であることをいう。人間の目的という意味である。それはすべてであり、人間の目的であるから「人間のすべての目的」である。(sarvaś ca puruṣārthaś ceti)。「すべて」というのは近い (nikaṭa)、遠い (dūra)、そのよう (tathā)、世間的 (laukika)、出世間的 (lokottara)、また、放棄されるべきもの（heya）、獲得されるべきもの (upādeya) と無視されるべきもの (upekṣaṇīya) である」）

[42]D 3a3-5; P 3b3-6 を見よ。

[43]D 3a5-6; P 3b6-7: skyes bu’i don de thams cad kyi rgyu ni yang dag pa’i shes pa yin te / ’di ltar mngon sum la sogs pa’i shes pas dmigs nas mtshon cha dang / dug dang / tsher ma la sogs pa ni yongs su spong ngo // me tog phreng la sogs pa ni len to // de ma yin pa gzhan dag la ni btang snyoms su byed do //（「人間の目的、それらすべての原因は正しい認識であり、すなわち、知覚などの (認識によって認識されるから武器と毒と棘などをすべて放棄する。華蔓などを獲得する。それら (獲得されるべきものと放棄されるべきもの) ではなくて、以外のものに対しては無関心である」）

間のすべての目的の成就」と理解していることは明らかであり、それら（放棄すること、獲得することと無関心であること）の原因が正しい認識であると彼は考えるであろう。

### 4.11.4　iti と tad の分析

ダルモーッタラは iti という語が理由（tasmāt）を意味すると説明している。したがって、NB 1.1 は次のことを意味する。人間の目的のすべての成就は正しい認識を先行要素とする、それゆえ（iti）、それ（正しい認識）を理解させる。そして、samyagjñānapūrvikā という複合語において「正しい認識」（samyagjñāna）が従属要素とされているとしても、正しい認識はこの作品において理解させられるものであるので、主要要素となり、tad という語と関係している[44]。

ダルモーッタラと同様にヴィニータデーヴァもまた iti という語を原因という意味で解釈している。そして、彼によれば、NB 1.1 において、tad は中性名詞である。しかしながら、成就（siddhi）は女性名詞であり、「実際には、〔人間のすべての目的の成就〕は単数（eka）ではない（複数）から〕」と彼は述べている。したがって、tad は成就（siddhi）の直後にあるとしても、tad という語は siddhi と結びつかなくて、主題である正しい認識と結びつくと彼は考える[45]。

### 4.11.5　正しい認識が理解させられる（vyutpādyate）

既に上述したように作品の目的は正しい認識を理解させること（正しい認識が理解させられること）である。ダルモーッタラによれば、正しい認識に関する四種類の誤った理解を排除することを通じて、正しい認識が理解させられる。そして、四種類の誤った理解は「数に関する誤った理解」、「定義に関する誤った理解」、「対象に関する誤った理解」と「結果に関する誤った理解」である[46]。そしてその正しい認識は、四種類の見解が錯誤であることを知ることを通じて、理解させられるとヴィニータデーヴァは述べている。彼は四種の見解を次のように説明している[47]。

- ［数に関する見解］ある者たちは正しい認識は一種のみであると主張する（Bārhaspatya）。ある者たちは三種であると主張する（*Sāṃkhya, Grangs can pa rnams）。ある者たちは四種であると主張する（*Naiyāyika, Rigs pa can rnams）。ある者たちは六つ種であると主張する（*Mīmāṃsaka, Spyod pa can rnams）。
- ［自性に関する見解］ある者たちは知覚を分別を伴うものにする。ある者たちは知覚を無分別なものとする。
- ［対象に関する見解］ある者たちは知覚の対象は独自相のみであり、推理の対象は共通相のみであると述べる。他の者たちは別のことを述べる。
- ［結果に関する見解］ある者たちは正しい認識の結果は正しい認識と異なると主張する。ある者たちは異ならないと主張する。

したがって、ヴィニータデーヴァの言う「四種の見解」はダルモーッタラが考える「四種の誤った理解」と一致しない。上述したヴィニータデーヴァの説明から見れば、彼は誤った理解のみならず、正しい理解をも述べているからである。それゆえ、ヴィニータデーヴァの説明を次のように理解すべきである。四種の理解のうち、正しいものを知り、誤ったものを排除することを通じて、正しい認識が理解させられる。

---

[44] NBṬD 34, 2-6 を見よ。

[45] D 3a7; 3b1-2; P 4a1-3 を見よ。

[46] NBṬD 34, 7; 35, 1 を見よ。

[47] D 3b2-5; P 4a3-8 を見よ。

### 4.12 ダルモーッタラ釈に基づく NB 1.1 の総義

ダルモーッタラ釈に基づいて、NB 1.1 の総義を以下のように整理する。

正しい認識には二種ある。知覚と推理である。知覚が生じるとき、人間の目的が成就するので、知覚は人間の目的のすべての遂行の直接原因である。一方、推理の場合において、人間の目的の遂行には二種ある。すなわち放棄されるべき目的を放棄することと獲得されるべき目的を獲得することである。そして、人間の目的が遂行されるならば、それは必ず推理を先行要素とする。したがって、人間の目的のすべての遂行は正しい認識を先行要素とする。それゆえ、語り手はそれ（正しい認識）を弟子に理解させ、聞き手はそれ（正しい認識）を自分にして理解させる。この作品は目的（正しい認識を理解させること）達成の手段であり、この作品を聴聞することによって、正しい認識に関する四種の誤った理解を排除することができる。そして、四種の誤った理解を排除することを通じて、正しい認識が生じさせられる（理解させられる）。

## 5 結論

ダルモーッタラはまず作品の構成要素を検討する。そして、彼は「正しい認識」の定義を説明し、知覚と推理が正しい認識である理由及び別の認識が正しい認識ではない理由を述べる。更に彼は正しい認識が対象を示す時間と実際の対象獲得時間が不一致であることを検討する。最後に彼は NB.1.1 における各語の分析を行う。一方、ヴィニータデーヴァはまず作品の構成要素を検討し、NB 1.1 の総義を述べる。そして、彼は各語の意味を説明している。最後に彼は正しい認識を知る方法を提示し、四種類の見解を例示する。

先行研究は両注釈家の議論のうち、構成要素に関する部分を分析する。本稿ではそれ以外の内容も検討し、両注釈を全面的に扱った 。そして、両注釈家の間には以下のような解釈の相違が存在することが明らかとなった。

1) ダルモーッタラは sarvapuruṣārthasiddhi を主題の目的とし、ヴィニータデーヴァはそれを目的の目的とする。この違いは、ダルモーッタラが人は Nyāyabindu を学習する前には正しい認識を持たないと考えている一方で、ヴィニータデーヴァが人は Nyāyabindu を学習する前に正しい認識と正しくない認識の両方を持っていると考えていることに起因すると考えられる。
2) ヴィニータデーヴァは NB 1.1 が直接に「主題」「目的」「目的の目的」を述べると考え、ダルモーッタラは「主題の目的」だけを NB 1.1 において述べられる内容とする。彼は、tad と vyutpādyate という両語は「主題」と「目的」を直接に述べることができないと考えているからである。
3) ヴィニータデーヴァは「作品の目的」が語り手の目的であると明言している。一方、ダルモーッタラは「作品の目的」には二種あり、語り手と聞き手の両方の目的であると考える。
4) 正しい認識の定義について、ダルモーッタラは「獲得可能な対象を示すこと」をその判断基準とし、ヴィニータデーヴァは「目的実現に対して欺かないこと」を判断基準とする。ダルモーッタラは「対象を獲得すること」が判断基準にならないことを意識したからである。
5) ヴィニータデーヴァは NB 1.1 における「先行要素」（pūrva）という語を「原因」（kāraṇa）で解釈している。一方、ダルモーッタラは「原因」と「先行要素」を区別する。そして、推理は人間の目的のすべての成就の直接原因ではないので、ダルマキールティは「先行要素」という語を使用していると彼は考えている。
6) ヴィニータデーヴァは NB 1.1 における「目的」（artha）という語を三種類に分ける。「放棄されるべき目的」、「獲得されるべき目的」と「無関心な目的」である。そして、ダルモーッ

タラは無関心な目的がまさに放棄されるべきと考え、「目的」を「放棄されるべき目的」と「獲得されるべき目的」という二種に分ける。

7) 両者は同じく「すべて」（sarva）という語が必然性を意味すると考えている。ヴィニータデーヴァは「すべて」を「目的」にかけ、「すべての目的」と理解している。一方、ダルモーッタラは「すべて」を「成就」にかける。

8) ダルモーッタラは正しい認識が四種類の誤った理解を排除することで理解させられると考え、ヴィニータデーヴァは正しい認識が四種類の見解における正しいものを知り、誤ったものを排除することによって理解させられると考えている。

## 6 翻訳研究

### 6.1 ダルモーッタラ

**1.1** 主題の目的をのべること及びその必要性の提示

NBṬD 5, 1; 7, 1-2: samyagjñānapūrviketyādināsya prakaraṇasyābhidheyaprayojanam ucyate /dvidhaṃ hi prakaraṇaśarīram—śabdaḥ, arthaś ca /

tatra śabdasya svābhidheyapratipādanam eva prayojanam nānyat atas tan na nirūpyate /

「正しい知を先行要素とする云々」という文（prakaraṇa）は〔この論書の〕主題の目的を述べている。周知のとおりに著作〔一般〕の本体は二種であり、言葉（śabda）と意味（artha）である。

それらのうち、言葉は「自らの表示対象を理解せしめるということ」だけを目的とし、それ以外のものは〔目的〕ではない。これ故、それ (言葉の目的) は考察されない。

NBṬD 7, 3; 8, 1-4: abhidheyaṃ tu yadi niṣprayojanaṃ syāt tadā tatpratipattaye śabdasandharbho ’pi nārambhaṇīyaḥ syāt /

yathā kākadantaprayojanābhāvāt na tatparīkṣā ārambhaṇīyā prekṣāvatā /

tasmād asya prakaraṇasyārambhaṇīyatvaṃ darśayatā abhidhyeyaprayojanam anena ucyate / yasmāt samyagjñānapūrvikā sarvapuruṣārhtasiddhiḥ, tasmāt tatpratipattaye idam ārambhyata iti ayam atra vākyārthaḥ /

atra ca prakaraṇābhidheyasya samyagjñānasya sarvapuruṣārthasiddhihetutvaṃ prayojanam uktam /

一方、もし主題は目的をもたなければ、その場合、〔たとえこの作品は〕それ（主題）を理解させるために、語を紡ぐ（言葉の作品）としても着手されるべきではない。

例えば、烏の歯の目的は存在しない故に、思慮ある者は、それ（烏の歯）の考察を始めるべきではない。

それ故に、この著作は着手される価値をもつ物であることを示すために、〔ダルマキールティは〕この〔冒頭の一〕文をもっては〔著作の〕主題の目的を述べる。「人間の目的のすべての成就は正しい知を前提とする」。それゆえ、それ（正しい認識）の理解のために、この作品が着手されるというこのことは〔NB 1.1〕における、文の意味である。

そして、この〔sūtra〕において著作の主題である正しい認識は人間の目的のすべての遂行の原因であり、〔それ（主題）の〕目的が述べられる。

**1.2** 主題、目的と関係は NB 1.1 の効力（文の意味）によって理解されることの提示

NBṬD 9, 1: asmiṃś cārtha ucyamāne sambandhaprayojanābhidheyāni uktāni bhavanti /

そして、この文の意味が述べられるとき、関係、目的、主題は述べられたことになる。

NBṬD 10, 1-3: tathā hi—puruṣārthopayogi samyagjñānaṃ vyutpādyitavyam anena prakaraṇeneti bruvatā samyagjñānam asya śabdasaṃdarbhasyābhidheyam / tadvyutpādanaṃ prayojanam / prakaraṇaṃ cedam upāyo vyutpādanasyety uktaṃ bhavati /

すなわち「人間の目的に役立つ正しい知はこの著作によって理解せしめられるべき[48]」と述べるため、正しい知がこの文（言葉の集合:śabdasaṃdarbha）の主題であり、それ（正しい知）を理解させることが目的であり、そして、この著作はそれ（正しい知）を理解させる手段であるということが述べられたことになる。

NBṬD 10, 4-6: tasmād abhidheyabhāgaprayojanābhidhānasāmarthyāt sambandhāni uktāni bhavanti / na tu idam ekaṃ vākyaṃ sambandham , abhidheyam , prayojanaṃ ca vaktuṃ sākṣāt samartham / ekaṃ tu vadat trayaṃ sāmarthyāt darśayati /

それゆえ、主題という部分の目的の直接表示効力によって、関係などが述べられることになる。しかし、この一文は関係と主題と目的を直接述べることができない。一方、〔この〕一〔文〕を言う時、三つ（主題、目的、関係）が［直接表示］効力によって、示すのである。

### **1.3** 目的と主題を示す語の提示及び両者（目的と主題）の考察

NBṬD 10, 6; 11, 1-4: tatra tad iti abhidheyapadam / vyutpādyata iti prayojanapadam / prayojanaṃ cātra vaktuḥ prakaraṇakaraṇavyāpārasya cintyate, śrotuś ca śravaṇavyāpārasya /

tathā hi — sarve prekṣāvantaḥ pravṛttiprayojanam anviṣya pravartante / tataś cācāryeṇa prakaraṇaṃ kimarthaṃ kṛtam, śrotṛbhiś ca kimarthaṃ śrūyata iti saṃśaye vyutpādanaṃ prayojanam abhidhīyate /

そこ（NB 1.1）において、tad という語は主題〔を表示する〕語であり、vyutpādyate という語は目的〔を表示する〕語である。そして、この場合、「目的」は語り手が著作を書く働きの目的と聞き手が〔著作を〕聴聞する働きの目的〔の両方を意味する〕。

すなわち、あらゆる思慮ある者たちは行動の目的を目指して、行動する。そして、それゆえ、師（Dharmakīrti）はどういう目的で著作を作ったのか、そして、聴聞者（弟子）たちはどういう目的で［著作を］聴聞するのかという疑惑に対して、「〔正しい知を〕理解させること」という目的が述べられる。

NBṬD 11, 4-6: samyagjñānaṃ vyutpādyamānānām[49] ātmānaṃ vyutpādakaṃ kartuṃ prakaraṇam idaṃ kṛtam / śiṣyaiś cācāryaprayuktām ātmano vyutpattim icchadbhiḥ prakaraṇam idaṃ śrūyata iti prakaraṇakaraṇaśravaṇayoḥ prayojanaṃ vyutpādanam /

正しい認識を理解させるられている者たちにとって、〔ダルマキールティは〕自身を理解させる者にするためにこの著作を作った。

そして、弟子たちは師によって引き起こされた自身の〔正しい認識の〕理解を求めて、この著作を聴聞する。したがって、著作を作ることと聴聞することの〔両者の〕目的は〔同じく正しい認識を〕理解させることである。

---

[48]NB1.1 における vyutpādyate という語は vyut√pad という動詞語根から派生した語である。vyut√pad は「生じる」という意味を持つ。したがって、「生じさせられる」は vyutpādyate という語の本来の意味である。ダルモーッタラは NBṬD 7, 3; 8, 1-4 で NB1.1 における vyutpādyate を「理解する」(pratipatti) で言い換えているので、本稿はこの説明に基づいて、vyutpādyate という語を「理解させられる」で訳す。

[49]vyutpadyamānānān ]S 生じさせられる（vyutpādyate）と生じさせる（vyutpādaka）の対応関係を考慮して、vyutpādyamānānām の読みをとる

**1.4** 関係を示す語の非存在の提示及び関係の考察

NBṬD 12, 1: sambandhapradarśanapadaṃ tu na vidyate / sāmarthyād eva tu sa pratipattavyaḥ /

一方、〔NB 1.1 に著作と目的の〕「関係」を示す語は存在しない。しかし、それ（著作と目的の関係）はまさに言明効力を通じて、理解されるべきである。

NBṬD 12, 2-3: prekṣāvatā hi samyagjñānavyutpādanāya prakaraṇam idam ārabdhavatā ayam evopāyo nānyaḥ iti darśita evopāyopeyabhāvaḥ prakaraṇaprayojanayoḥ sambandha iti /

なぜなら、思慮ある者（ダルマキールティ師）は正しい知を理解させるためにこの著作を着手したのであるから。「これ〔本著作〕だけが（正しい知を理解させる）手段であり、他のものは〔手段〕ではない」ということが確実に示され、著作と目的の関係は「手段と目的の関係」（upāyopeyabhāva）である。

**2.1** プラマーナを持たない者に主題などを述べることについての議論及び作者がそれらを述べる合理性の提示

NBṬD 13, 1-2: nanu ca prakaraṇaśravaṇāt prāg uktāny apy abhidheyādīni pramāṇābhāvāt prekṣāvadbhir na gṛhyante / tat kim etair ārambhapradeśa uktaiḥ

【反論】［この］著作を聴聞する前に、［たとえ］主題などが言われたとしても、〔主題などを〕正しく認識する手段（pramāna）は存在しないため、思慮ある者たちは〔主題などを〕受け入れることはない〔であろう〕。それゆえ、これら（主題など）が〔著作の〕冒頭部分に述べられることは〔一体〕何になるのか。

NBṬD 13, 3-4: satyam / aśrute prakaraṇe kathitāny api na niścīyante / ukteṣu tv apramāṇakeṣv apy abhidheyādiṣu saṃśaya utpadyate / saṃśayāc ca pravartante /

【答論】確かにその通りである。著作を〔全部〕聴聞していないとき、たとえ〔主題などが〕言われるとしても、〔主題などが有益なものとして〕確定されない[50]。しかし、〔それらを〕正しく認識する手段のない主題などが言われるときに疑惑は生じる。そして、疑惑を通じて、〔人は〕行動する。

NBṬD 13, 4; 14, 1: arthasaṃśayo ’pi hi pravṛttyaṅgaṃ prekṣāvatām / anarthasaṃśayo nivṛttyaṅgam / ata eva śāstrakāreṇaiva pūrvaṃ saṃbandhādīni yujyante vaktum /

実に、思慮ある者たちにとって、〔有益であるという確定のみならず〕[51]、有益なのではないかという疑惑もまた行動の要因である。無益なのではないかという疑惑は〔行動を〕やめる要因である。まさにこれ故、論書（śāstra）の作者だけによって、〔注釈者、物語作者ではなくて、著作自体を語る〕前に「関係」などが述べられることは妥当である。

NBṬD 14, 2-3: vyākhyātṛṇāṃ hi vacanaṃ krīḍādyartham anyathāpi sambhāvyate / śāstrakṛtāṃ tu prakaraṇaprārambhe na viparītābhidheyādyabhidhāne prayojanam utpaśyāmo nāpi pravṛttim / atas teṣu saṃśayo yuktaḥ /

なぜなら、注釈者たちの言葉は遊びなどを目的とする［こともあるので］、違ったようにも（主題、目的、関係以外を述べることが）考えられる。しかし、学術書の作者たちが著作の冒頭において、誤った主題などを述べることの目的を私たちは見出さないし、［作者は実際に誤った主題などを述べるという］行動も［私たちは見出さない］。これゆえ、それら（主題・目的・関係）に対する疑惑は妥当である。

---

[50] 主題が主題として確定されないように。

[51] Dhp on NBṬD on NB 1.1: na kevalam arthaniścaya iti apiśabdenāha「『有益である』という判断だけではないというのが api という語［の意味である］」

**2.2**「非利益」という想像の例示

NBṬD 14, 4-7: anukteṣu tu pratipattṛbhir niṣprayojanam abhidheyaṃ sambhāvyetāsya prakaraṇasya, kākadantaparīkṣāyā iva / aśakyānuṣṭhānaṃ vā, jvaraharatakṣakacūḍāratnālaṃkāropadeśavat / anabhimataṃ vā prayojanam mātṛvivāhakramopadeśavat, ato vā prakaraṇāt laghutara upāyaḥ prayojanasya, anupāya eva vā prakaraṇaṃ sambhāvyeta /

一方、〔主題などが〕述べられなければ、烏の歯の考察の〔主題（烏の歯）が目的を持たない〕ように、聴聞者は著作の主題は目的を持たないと想像するであろう。

あるいは、「熱を取り除く竜王の頭部の宝石で装飾〔せよ〕」という教示〔が実行不可能〕であるように、〔聴聞者は著作の主題の目的が〕実行不可能〔と想像するであろう〕。

あるいは、母の〔再〕婚の手順という教示〔は望ましくない目的を持つ〕ように、〔聴聞者は著作の主題が〕望ましくない目的を持つ〔と想像するであろう〕。

あるいは、〔聴聞者はこの〕著作より簡単な目的達成の手段がある〔と想像するであろう〕。

あるいは、〔聴聞者はこの〕著作は決して手段ではない〔と想像するであろう〕。

**2.3**「有益」という想像は主題などの言明によってもたらされること及びそれ（有益という想像）も行動の要因であることの提示

NBṬD 15, 1: etāsu ca anarthasambhāvanāsu ekasyām api anarthasambhavanāyām na prekṣāvantaḥ pravartante /

そして、〔上述した〕「これら無益なのではないか」という想像のうち、たとえ「無益なのではないか」という想像が一つでもあれば、思慮ある者たちは行動（著作を聴聞すること）しないであろう。

NBṬD 15, 1; 16, 1-2: abhidheyādiṣu tu ukteṣu arthasambhāvanā anarthasambhāvanāviruddhā utpadyate / tayā prekṣāvantaḥ pravartante iti prekṣāvatāṃ pravṛttyanyangam arthasambhāvanāṃ kartuṃ sambandhādīny abhidhīyanta iti sthitam /

しかし、主題などが述べられるとき、「無益なのではないか」という想像と矛盾する「有益なのではないか」という想像が生じる。それ（有益なのではないかという想像）を通じて、思慮ある者たちは行動する。したがって、思慮ある者たちの行動の要因である「有益なのではないか」という想像をもたらすために、「関係」などが説明されていると確立された。

**3.1** 正しい認識（samyagjñāna）の定義の提示

NBṬD 17, 1-3: avisaṃvādakaṃ jñānaṃ samyagjñānam / loke ca pūrvam upadarśitam arthaṃ prāpayan saṃvādaka ucyate / tadvaj jñānam api svayaṃ pradarśitam arthaṃ prāpayat saṃvādakam ucyate /

「正しい認識」（samyagjñāna）は欺かない認識である。そして、世間において〔ある者は自分が〕以前に示した対象を〔人に〕獲得させるならば、〔その者は〕欺かない〔者〕と呼ばれる。それと同様に、認識もまた、〔ある認識は自分が〕以前に示した対象を〔人に〕獲得させるならば、〔その認識は〕欺かない〔認識〕と呼ばれる。

NBṬD 17, 3; 18, 1: pradarśite cārthe pravarttakatvam eva prāpakatvam , nānyat / tathā hi na jñānaṃ janayad arthaṃ prāpayati / api tv arthe puruṣaṃ pravarttayat prāpayaty artham /

そして、〔自ら〕示した対象を〔人に〕獲得させることは〔示した対象を人に〕行動させることに他ならない。すなわち、認識は対象を生じさせ、〔人に〕獲得させるのではない。そうで

はなくて、〔認識は〕人を対象に向かて行動させるから、〔認識は人に〕対象を獲得させる〔という意味である〕。

NBṬD 18, 1-2: pravarttakatvam api pravṛttiviṣayapradarśakatvam eva / na hi puruṣaṃ haṭhāt pravartayituṃ śaknoti vijñānam /

〔人に〕行動させることは〔人に〕行動対象を示すことに他ならない。なぜなら、認識は強制的に人を行動させることのできないものだからである。

**3.2** 正しい認識の結果は対象理解（arthādhigati）であること及び正しい認識は未理解のものを対象とすることの提示

NBṬD 19, 1-2: ata eva ca arthādhigatir eva pramāṇaphalam / adhigate cārthe pravartitaḥ puruṣaḥ prāpitaś ca arthaḥ / tathā ca sati arthādhigamāt samāptaḥ pramāṇavyāpāraḥ /

そして、まさにこれ故、正しい認識手段の結果（pramāṇaphala）は対象理解（arthādhigati）に他ならない。そして、対象が理解されるとき、人は行動させられ、そして対象が獲得される。そしてそのように、正しい認識手段の働き（pramāṇavyāpāra）は対象理解で終わる。

NBṬD 19, 2-4: ata eva cānadhigataviṣayaṃ pramāṇam / yenaiva hi jñānena prathamam adhigato ’rthaḥ, tenaiva pravartitaḥ puruṣaḥ prāpitaś cārthaḥ / tatraiva ca arthe kim anyena jñānenādhikaṃ kāryam / ato ’dhigataviṣayam apramāṇam /

そして、まさにこれ故、正しい認識手段は〔未だ〕理解されていないものを対象とする。なぜなら、ある認識によって、まず対象が理解され、まさにその〔同じ〕認識によって、人は行動させられ、そして対象が獲得される。そして、まさにその対象に対して別の認識によって、〔他〕の何の作用が〔なされうるのか〕。これ故、〔既に〕理解されたものを対象とする〔認識は〕正しい認識手段ではない。

**3.3** 両認識（知覚と推理）は獲得可能な対象を示すので正しい認識であることの提示

NBṬD 20, 1-3: tatra yo ’rtho dṛṣṭatvena jñātaḥ sa pratyakṣeṇa pravṛttiviṣayīkṛtaḥ / yasmād yasmin arthe pratyakṣasya sākṣātkāritvavyāpāro vikalpena anugamyate, tasya pradarśakaṃ pratyakṣam tasmād dṛṣṭatayā jñātaḥ pratyakṣadarśitaḥ / anumānaṃ tu liṅgadarśanān niścinvat pravṛttiviṣayaṃ darśayati /

その場合、見られていることによって認識された対象は、知覚によって、行動の対象とされた。ある対象に対して、知覚の〔対象を〕直証作用という働きは概念知に付き従われる。そのような対象を示すのは知覚であるから、したがって、〔ある対象が〕見られていることによって認識されたとき、〔その対象は〕知覚によって示された。一方、推理は証因を見ることを通じて〔獲得対象を〕確定するとき、行動対象を示すのである。

NBṬD 21, 1-2: tathā ca pratyakṣaṃ partibhāsamanaṃ niyatam arthaṃ darśayati / anumānaṃ ca liṅgasambaddhaṃ niyatam arthaṃ darśayati / ata ete niyatasyārthasya pradarśake / tena te pramāṇe nānyad vijñānam /

そして、そのように知覚は〔現に〕顕現していて、〔且つ時間、空間に〕限定された対象を示す。そして、推理は証因と結びついていて、〔かつ時間、空間に〕限定された対象を示す。これ故、これら両者（知覚と推理）は限定された対象を示す者である。これ故、それら両者は正しい認識手段であり、別の認識は〔正しい認識手段〕ではない。

NBṬD 21, 3: prāptuṃ śakyam artham ādarśayat prāpakam / prāpakatvāc ca pramāṇam /

［認識は］獲得可能な対象を示すから、獲得させるものである。そして、獲得させるものであるから、［正しい］認識手段（pramāṇa）である。

**3.4** 他の認識は獲得不可能な対象を示すため正しい認識ではないということの提示

NBṬD 22, 1-2: ābhyāṃ pramāṇābhyām anyena ca jñānena darśito ’rthaḥ kaścid atyantaviparyastaḥ / yathā marīcikāsu jalam / sa cāsattvāt prāptum aśakyaḥ /

そして、この両者以外の他の認識によって示された対象の一部は完全に虚偽なるものである。例えば蜃気楼における水のように。そして、それ（蜃気楼における水）は存在しないから獲得不可能である。

NBṬD 22, 2-4; 23, 1: kaścid aniyato bhāvābhāvayoḥ yathā saṃśayārthaḥ / na ca bhāvābhāvābhyāṃ yukto ’rtho jagaty asti tataḥ prāptum aśakyas tādṛśaḥ / sarveṇa cāliṅgena vikalpena niyāmakam adṛṣṭvā pravṛttena bhavābhāvayor aniyata evārtho darśayitavyaḥ / sa ca prāptum aśakyaḥ /

またある対象は存在にも、非存在にも限定されていないものである。例えば、疑惑の対象である。なぜなら、存在・非存在［の両方とも］結びつく対象は世間において、存在しないからである。それゆえ、そのような対象は獲得不可能である。

そして、証因に基づかないすべての概念知は、制限をするもの（証因）を考察せず働くから、存在にも、非存在にもまさに限定されていない対象を示すはずである。そしてそれは獲得不可能である。

NBṬD 23, 1-2: tasmād aśakyaprāpaṇam atyantaviparītam bhāvābhāvāniyataṃ cārthaṃ darśayad apramāṇam anyaj jñānam /

それゆえ、他の認識は〔人に〕獲得不可能な、存在と非存在のいずれにも限定されなくて、完全に虚偽なる対象を示すため、正しい認識手段ではない。

**3.5** 正しい認識を考察するということの提示

NBṬD 23, 2-3: arthakriyārthibhiś cārthakriyāsamarthavastuprāptinimittaṃ jñānaṃ mṛgyate / yac ca tair mṛgyate tad eva śāstre vicāryate /

そして、目的実現（arthakriyā）を求める者たちは目的実現に対する能力の持つ実在物（vastu）を獲得する原因である認識を求める。そして、その者たちによって求められるものこそが〔この〕学術書において考察される。

NBṬD 23, 3-4; 24, 1: tato ’rthakriyāsamarthavastupradarśakaṃ samyagjñānam / yac ca tena pradarśitaṃ tad eva prāpaṇīyam / arthādhigamātmakaṃ hi prāpakam ity uktam /

それゆえ、正しい認識は目的実現に対する能力のある実在物を示すものである。そして、それ（正しい認識）によって示されたものこそが獲得されるべきものである。実に獲得させる者は対象理解（arthādhigama）を本質とするということは既に説明されたのである。

**3.6** 正しくない認識の対象である別の実在物の定義の提示

NBṬD 25, 1-2: tatra pradarśitād anyad vastu bhinnākāram bhinnadeśam bhinnakālaṃ ca / viruddhadharmasaṃsargād dhi anyad vastu / deśakālākārabhedaś ca viruddhadharmasaṃsargaḥ /

その場合、〔正しい認識によって〕示された〔実在物〕とは別の実在物は形象（ākāra）が異なり、場所が異なり、時間が異なる。実に、矛盾する属性と結びつくから、別の実在物〔と我々は呼ぶのである〕。そして、矛盾する属性と結びつくことは場所、時間、形象を異にすることである。

**3.7** 正しくない認識の例示

NBṬD 25, 3-4: tasmād anyākāravadvastugrāhi nākārāntaravati vastuni pramāṇaṃ / yathā pītaśaṅkhagrāhi śukle śaṅkhe /

それゆえ、別の形象を有する実在物を把握している〔認識はそれとは〕異なる形象を有する実在物に対して正しい認識手段ではない。例えば、〔白とは別の〕黄色い巻貝を把握している〔認識は黄色い巻貝とは〕異なる白い巻貝に対して〔正しい認識手段ではない〕ように。

NBṬD 25, 4-5: deśāntarasthagrāhi ca na deśāntarasthe pramāṇam / yathā kuñcikāvivaradeśasthāyāṃ maṇiprabhāyāṃ maṇigrāhi jñānaṃ nāpavarakasthe maṇau /

また、別の場所にある〔実在物を〕把握している〔認識はそれとは〕異なる場所にある〔実在物〕に対して正しい認識手段ではない。例えば、鍵の穴のところにある宝石の輝きに対して宝石を把握している認識は室内にある宝石に対して〔正しい認識手段ではないように〕。

NBṬD 25, 5-7: kālāntarayuktagrāhi ca na kālāntaravati vastuni pramāṇam / yathārddharātre madhyāhnakālavastugrāhi svapnajñānaṃ nārdharātrakāle vastuni pramāṇam /

また、別の時間にある〔実在物を〕把握している〔認識はそれとは〕異なる時間にある〔実在物〕に対して正しい認識ではない。例えば、深夜において、正午の時間にある実在物を把握している夢眠時の認識（夢）は深夜の時間にある実在物に対して正しい認識手段ではないように。

**3.8** 示す時間と獲得時間が不一致であることの説明

NBṬD 26, 1-2: nanu ca deśaniyatam ākāraniyataṃ ca prāpayituṃ śakyam / yatkālaṃ tu paricchinnaṃ tatkālaṃ na śakyaṃ prāpayitum /

【反論】場所により限定された〔実在物〕と形象が限定された〔実在物〕を獲得することはできる。しかし、ある時間において〔実在物が〕限定され、〔認識は〕その時間において〔限定された実在物を人に〕獲得させることができない。

NBṬD 26, 2-4: nocyate yasminn eva kāle paricchidyate tasminn eva kāle prāpayitavyam iti / anyo hi darśanakālaḥ anyaś ca prāptikālaḥ / kin tu yatkālaṃ paricchinnaṃ tad eva [1] prāpaṇīyam /abhedādhyavasāyāc ca santānagatamekatvaṃ draṣṭavyam iti /

【答論】ある時間において〔実在物が〕限定され、まさにその同じ時間において〔実在物が〕獲得させられるべきと〔我々は〕言っていない。実に〔実在物を〕示す時間と〔実在物を〕獲得する時間は異なる。

そうではなくて、ある時間において〔実在物〕が限定され、まさにその〔実在物が〕獲得されるべきである。そして、差異がないとの判断を通じて、〔刹那の〕連続体に存する同一性が認識されるべきである。

**4.1** pūrva の分析

NBṬD 27, 1: samyagjñānaṃ pūrvaṃ kāraṇaṃ yasyāḥ sā tathoktā / kāryāt pūrvaṃ bhavat kāraṇaṃ pūrvam uktaṃ /

先行要素（pūrva）は原因（kāraṇa）を意味し、正しい認識を先行要素（原因）とするもの（人間の目的のすべての遂行）はそのように表示される。結果より先に存在するから、原因は「先行要素」といわれる。

[1] tad eva tena] S read tad eva prāpaṇīyam

NBṬD 27, 2: kāraṇaśabdopādāne tu puruṣārthasiddheḥ sākṣātkāraṇaṃ gamyeta / pūrvaśabde tu pūrvamātram /

しかし、「原因」（kāraṇa）という語が述べられるとき、〔正しい認識は〕人間の目的の遂行の直接原因（sākṣātkāraṇa）と理解されるであろう。一方、「先行要素」という語が〔述べられるとき、正しい認識は人間の目的の遂行の〕単なる先行要素〔と理解されるであろう〕。

NBṬD 28, 1-2: dvividhaṃ ca samyagjñānaṃ arthakriyānirbhāsam arthakriyāsamarthe ca pravartakam / tayor madhye yat pravartakaṃ tad iha parīkṣyate /

そして、正しい知には二種ある。「目的実現の顕現を有するもの」と「目的実現に対する能力のある〔対象〕に対して、〔人に〕行動させるもの」である。その二者のうち、〔目的実現に対する能力のある〔対象に対して人に〕行動させるもの、それがここにおいて考察される。

NBṬD 28, 2-4: tac ca pūrvamātram / na tu sākṣātkāraṇam / samyagjñāne hi sati pūrvadṛṣṭasmaraṇam / smaraṇād abhilāṣaḥ / abhilāṣāt pravṛttiḥ pravṛtteś ca prāptiḥ / tato na sākṣāddhetuḥ /

そして、それ（行動させる認識）は単なる先行要素であり、直接原因ではない。実に〔この種の〕正しい認識が起こるとき、以前に知覚されたものの想起〔が起こる〕。想起を通じて、欲求〔が起こる〕。欲求を通じて、行動〔が起こる〕。そして行動を通じて、〔対象を〕獲得すること〔が起こる〕。それゆえ、〔この種の認識は〕直接原因ではない。

NBṬD 29, 1-2: arthakriyānirbhāsaṃ tu yady api sākṣātprāptiḥ, tathāpi tan na parīkṣaṇīyam / yatraiva hi prekṣāvanto ’rthinaḥ śāśaṅakāḥ , tat parīkṣyate /

たとえ、目的実現の顕現〔を有する認識〕は直接に〔対象を〕獲得すること〔そのもの〕であるとしても、その〔認識が〕考察されるべきではない。実に、ある対象に対して思慮があって〔目的実現を〕求める者たちが懸念（目的実現ができないのではないか）を抱くときだけ、その〔対象が〕考察される。

NBṬD 29, 2-4: arthakriyānirbhāse ca jñāne sati siddhaḥ pūruṣārthaḥ / tena tatra na sāśaṅkā arthinaḥ / atas tan na parīkṣaṇīyam / tasmāt parīkṣārham asākṣātkāraṇaṃ samyagjñānamādarśayituṃ kāraṇaśabdaṃ parityajya pūrvagrahaṇaṃ kṛtam /

しかし（ca）、目的実現の顕現を有する認識が生じるとき、人間の目的は遂行される。それゆえ、その認識に対して、〔目的実現を〕求める者たちは懸念を抱かない。それゆえ、考察に値し、直接原因ではない正しい認識を示すために、「原因」という語を放棄して「先行要素」の言明がなされる。

### **4.2** puruṣārtha の分析

NBṬD 30, 1-3: puruṣasyārthaḥ puruṣārthaḥ / arthyate iti arthaḥ, kāmyate iti yāvat / heyo ’rthaḥ, upādeyo vā / heyo hy artho hātum iṣyate, upādeyo ’pi upādātum / na ca heyopādeyābhyām anyo rāśir asti / upekṣaṇīyo hy anupādeyatvād heya eva /

〔NB 1.1 における〕puruṣārtha は人間の目的〔を意味する〕。artha という語は動詞語根 arth から行動対象の意味で派生して、要するに求められるもの〔を意味する〕。放棄されるべき対象あるいは獲得されるべき対象〔を意味する〕。実に放棄されるべき対象は放棄しようと望まれ、また獲得されるべき対象は獲得しようと望まれる。そして、放棄されるべき対象と獲得されるべき対象以外の第三者は存在しない。なぜなら、無視されるべき〔対象〕ではないものは獲得されるべき〔対象〕ではないため、放棄されるべき〔対象〕に他ならない。

NBṬD 30, 3-5: tasya siddhiḥ—hānam, upādānaṃ ca / hetunibandhanā hi siddhir utpattir ucyate / jñānanibandhanā tu siddhir anuṣṭhānam / heyasya ca hānam anuṣṭhānam upādeyasya copādānam / tato heyopādeyayor hānopādānalakṣaṇānuṣṭhitiḥ siddhir ity ucyate /

それ（artha:目的、対象）の成就（siddhi）は〔放棄されるべき対象を〕放棄することと〔獲得されるべき対象を〕獲得することである。実に原因を根拠とする成就（siddhi）は「発生」（utpatti）と呼ばれる。一方、認識を根拠とする成就は「遂行」（anuṣṭhāna）と呼ばれる。遂行とは放棄されるべき〔対象を〕放棄することと獲得されるべき〔対象を〕獲得することである。それゆえ、放棄されるべき〔対象を〕放棄すること及び獲得されるべき〔対象を〕獲得することを特徴とする遂行は〔NB 1.1 において〕「成就」（siddhi）と呼ばれる。

**4.3** sarva の分析

NBṬD 31, 1-4: sarvā cāsau puruṣārthasiddhiś ceti / sarvaśabda iha dravyakārtsnye vṛttaḥ, na tu prakārakārtsnye / tato nāyam arthaḥ—dviprakārāpi siddhiḥ samyagjñānanibandhanaiveti / api tv ayam arthaḥ—yā kācit siddhiḥ sā sarvā kṛtsnaivāsau samyagjñānanibandhaneti / mithyājñānād dhi kākatālīyāpi nāsty arthasiddhiḥ /

sarvapuruṣārthasiddhi は sarva と puruṣārthasiddhir からなる karmadhāraya であり、人間の目的の全ての成就を意味する。この〔NB 1.1 における〕sarva という語は実体の総体を意味しているのであって、様態の総体を意味するのではない。それゆえ、〔NB 1.1 は〕次のことを意味するのではない—二種類の「成就」の両方とも必ず正しい認識を根拠とする。そうではなくて、およそ成どんな就（siddhi）であれ、それはまさに全て正しい認識を根拠とする。なぜなら、錯誤知によって〔たとえ〕偶然であっても目的の成就〔が起こることは〕ないからである。

NBṬD 31, 4; 32, 1-4: tathā hi yadi pradarśitam arthaṃ prāpayaty evaṃ tato bhavaty arthasiddhiḥ / pradarśitaṃ ca prāpayat samyagjñānam eva / pradarśitaṃ cāprāpayat mithyājñānam / aprāpakaṃ ca katham arthasiddhinibandhanaṃ syāt / tasmād yan mithyājñānaṃ na tato ’rthasiddhiḥ / yataś cārthasiddhis tat samyagjñānam eva / ata eva samyagjñānaṃ yatnato vyutpādanīyam yatas tad eva puruṣārthasiddhinibandhanam /

すなわち、〔ある認識は自ら〕示した対象を〔人に〕獲得させる。したがって、このように、目的の成就が生じる。しかし（ca）〔自ら〕示した対象を獲得させるのは正しい認識のみである。そして、錯誤知は〔自ら〕しめした対象を〔人に〕獲得させるものではない。そして、どうして〔自ら示した対象を人に〕獲得させないものが目的の実現の原因でありえようか。それゆえ、それ（錯誤知）によって目的の実現は〔生じ〕ない。そして目的の実現はそれ（正しい認識）だけに基づくのである。まさにこれ故、努力して、〔弟子に〕正しい認識を理解させるべきである。それ（正しい認識）のみが人間の目的の成就の根拠だからである。

NBṬD 34, 1-2: tato yāvad brūyāt yā kācit puruṣārthasiddhiḥ sā samyagjñānanibandhanaiveti tāvad uktaṃ sarvā sā samyagjñānapūrviketi /

それゆえ、およそ人間の目的の成就であれ、〔それは〕正しい知を根拠とするという限りのことをいうことができるとき、その限りで、人間の目的の成就は全て正しい知を先行要素とすると言われる。

**4.4** iti と tad の分析

NBṬD 34, 2-4: itiśabdas tasmād ity asminn arthe / yattadoś ca nityam abhisambandhaḥ / tad ayam arthaḥ- yasmāt samyagjñānapūrvikā sarvapuruṣārthasiddhiḥ, tasmāt tat samyagjñānaṃ vyutpādyate /

ここ（NB 1.1）における iti という語は「それゆえ」（tasmād）を意味する。そして、yad と tad は常に関係している。したがって、［NB 1.1 は］次のことを意味する—人間の目的の全ての成就は正しい認識を先行要素とする。それゆえ、それ（正しい認識）を〔弟子に〕学習させる。

NBṬD 34, 5-6: yady api ca samāse guṇībhūtaṃ samyagjñānam / tathāpīha prakaraṇe vyutpādayitavyatvāt pradhānam / tatas tasyaiva taccabdena sambandhaḥ /

また、〔この〕複合語において「正しい知識」が従属要素とされているとしても、〔この〕作品において、〔弟子に〕学習させられるものであるから、主要要素となる。それゆえ、正しい知こそが tad という語と関係するのである。

**4.5** vyutpādyate の分析及び四種の誤った理解の提示

NBṬD 34, 7; 35, 1: vyutpādyate iti vipratipattinirākaraṇena pratipādyate iti // caturvidhā cātra vipratipattiḥ saṃkhyālakṣaṇagocaraphalaviṣayā /

「理解させる」（vyutpādyate）という語は誤った認識を取り除くことを通じて、理解させられるという意味である。そして、この場合、誤った理解には四種ある、すなわち、数に関する〔誤った理解〕、定義に関する〔誤った理解〕、対象に関する〔誤った理解〕、結果に関する〔誤った理解〕である。

**6.2** ヴィニータデーヴァ

**1.1** NB 1.1 は関係、目的、主題を述べる

D 1b2-4; P 2a2-4

yang dag pa’i shes pa ni skyes bu’i don thams cad ’grub pa’i sngon du ’gro ba can yin pas na / de bstan to zhes bya ba’i tshig dang po ’dis ni rab tu byed pa ’di’i ’grel pa dang / dgos pa dang / brjod par bya ba dang dgos pa’i yang dgos pa bstan to //

「正しい認識は人間のすべての目的の成就の先行要素であるから、それ（正しい認識）を教示する」というこの最初の一文は、この論書の関係（∗saṃbandha, ’brel pa, 合目的性）と目的（∗prayojana）と主題（∗abhidheya）と目的の目的 (∗prayojanasya prayojana) を説いている。

**1.2** 三者（関係、目的、主題）を述べることは疑いを排除し、聞き手に意欲を生じさせるためであることの提示

D 1b4-5; P 2a4-6

’di ltar ’brel pa med pa dang / dgos pa med pa dang / brjod par bya ba med pa’i bstan bcos sam rab tu byed pa ni rtog pa sngon du gtong ba rnams khas mi len te /

すなわち、関係が欠け、目的が欠け、主題が欠けている論述書（∗śāstra）あるいは論書 (∗prakaraṇa) に対して、思慮を先行させる者たちはそれを承認しないのである。

D 1b5; 2a1; P 2a6; 2b1-2

’di ltar ’dir bshad par bya ba ni ci zhig yin snyam pa’i rmongs pa de bsal ba’i phyir brjod par bya ba bsnyad do // ’bras bu med du dgos pa bsal ba’i phyir dgos pa brjod do // thabs ma yin du dogs pa bsal ba’i phyir ’brel pa bsnyad do // de’i phyir nyan pa po spro ba skyed pa’i don du ’brel pa la sogs pa brjod do //

すなわち、「ここ（この論書）において何が言われるのか」という疑いを排除するために主題を述べる。「結果が存在しない」ということを排除するために目的を述べる。「〔手段が存在しない」という疑いを排除するために関係（合目的性）を述べる。それゆえ、聴者に意欲を生ぜしめるために関係などを述べる。

**1.3** NB 1.1 は主題と目的を直接に述べ、関係を効力（文の意味）によって説明することの提示及び効力（*sāmarthya）の説明

D 2a1-2; P 2b2-3

de la de bstan to zhes bya ba ’dis ni brjod par bya ba dang / dgos pa sngon du bstan to // ’brel pa ni shugs kyis bstan to //

そこ（NB 1.1）において、「それを教示する」という一文によって、主題と目的は直接に説明される。関係は〔論書の〕効力によって説明される。

D 2a2-3; P 2b3-4

de la shugs ni ’di yin te / ’di ltar yang dag pa’i shes pa bstan pa’i phyir / rab tu byed pa rtsom pas / don gyis na rab tu byed pa ni thabs nyid du ston to // de ltar ma yin na thabs ma yin pa la ji ltar ’jug par ’gyur te / de bas na ’brel pa ni don gyis bstan to //

その中で、「効力」（∗sāmarthya）は次のことを意味する。すなわち、〔作者は〕正しい認識を明らかにするために〔この〕論書を開始するため、〔NB 1.1 の〕意味からみて (∗arthāt)、〔この〕論書（∗prakaraṇa）は他ならぬ「手段」である。もしそうでなければ、〔作者は〕手段ではないこの作品に対して、どうして行動（作品に着手すること）がありえようか[52]。それゆえ、〔上述した正しい認識を明らかにするという〕目的から見て、関係が説かれる。

**1.4** 主題と目的を示す語の提示及び「関係」の説明

D 2a3-5; 2b1; P 2b4-7

’dir yang dag pa’i shes pa bstan to zhes bya ba de ni brjod par bya ba yin no // yang dag pa’i shes pa bstan pa ni dgos pa yin no // yang dag pa’i shes pa bstan pa de ni khong du chung bar byed pa’i rang bzhin yin la / rab tu byed pa ’dis byed pas na rab tu byed pa ’di ni dgos pa de’i thabs yin no // de lta bas na rab tu byed pa dang / dgos par thabs dang thabs kyis bsgrub par bya ba’i mtshan nyid kyis ’brel pa yin te / ’di ltar rab tu byed pa ’di thos pa las yang dag pa’i shes pa’i rang gi ngo bo ma nor bar shes par ’gyur bas /de’i phyir rab tu byed pa ni thabs yin la / yang dag pa’i shes pa’i yongs su shes pa ni thabs kyis bsgrub par bya ba yin par gnas so //

そして、ここ（NB 1.1）において「正しい認識を教示する」というそれ (正しい認識) は主題である。そして、正しい認識を教示することは目的である。そして、正しい認識を教示することは理解させることを自性とし、論書は〔上述したことを〕するから、この論書はその目的の手段である。それゆえ、論書と目的のための手段と手段によって成されることという特徴（∗lakṣaṇa）の間に関係がある。このように、この論書を聴聞することにより、正しい認識の自性 (∗svabhāva) を無錯乱に知るから、論書は手段であり、「正しい認識を遍知すること」は手段によって成されると確定される。

D 2b1-2; P 2b7-8; 3a1

de nyid bsgrub par bya ba dang / bsgrub pa’i mtshan nyid dang bya ba dang byed pa’i ngo bo’i mtshan nyid kyis ’brel pa yin te / ’di ltar bsgrub pa ni rab tu byed pa’o // bsgrub par bya ba ni ’bras

---

[52]行動という語はまた語の適用という意味で用いられる。その場合訳は次のようになる。もしそうでなければ、手段ではないこの作品に対して、どうして〔正しい認識という〕語の適用があるのか。
あるいは行動という語は聴聞者の行動を意味する。その場合訳は次のようになる。もしそうでなければ、手段ではないこの作品に対して、どうして行動（聴聞すること）がありえようか。
しかしながら、聴聞者は手段ではない作品を学習することも考えられるため、行動という語が聴聞者の行動を意味する可能性は低い。

bu’o // byed pa ni rab tu byed pa’o // bya ba ni ’bras bu yin pas de’i phyir yang dag pa’i shes pa yongs su shes par bya ba’i phyir rab tu byed pa ’di tsam mo zhes bya bar gnas so //

すなわち、成されること (∗sādhya) となすこと (*sādhana) の特徴 (∗lakṣaṇa)〔が相互に関係している〕そして、所作 (∗kārya) と能作 (∗kāraṇa) の特徴は〔相互に〕関係していて、こうして能証 (∗sādhana) は論書である。能証（論書）の結果は結果である。論書は能作であり、能作によってなされることは結果である。それゆえ正しい認識を遍知するためにこの論書を開始したのであると確定される。

**1.5** 目的の目的に対する質問及び目的の目的の説明

D 2b2-3; P 3a1-2

de ltar gnas su zin kyang ci ste la la zhig yang dag pa’i shes pa yongs su shes pas ci zhig bya ste de ni gang du yang mkho ba med ngo // de’i byir de ni bya rog gi so brtag pa bzhin du gnas pa ma yin bar khyod yongs su ngal bar ’gyur ro zhes ’dri bar ’gyur pa

〔関係が上述した〕ように確定されたとしても (∗api ca)、〔ある者は〕問いて曰く：「正しい認識を遍知したところで、何にもならない。そして、それはどこにおいても役に立たない。それゆえ、それは烏の歯を考察するように汝は苦労しても (∗pariśrama) 確定されないであろう」という質問が生じる。

D 2b3; P 3a2-3

de’i phyir skyes bu’i don thams cad ’grub pa ni yang dag pa’i shes pa sngon du ’gro ba can yin zhes bya ba ’di smos te des ni dgos pa’i yang dgos pa bstan to //

それゆえ「人間のすべての目的の完成は正しい認識に先行されるものである」と言われる。それゆえに目的のさらなる目的を説く。

**2** NB 1.1 の総義

D 2b3-5; P 3a3-5

de bas na tshig gi don ni ’di yin te / gang gi phyir yang dag pa’i shes pa skyes bu’i don thams cad ’grub pa las mkho bar gyur pa las de’i phyir bsgrims te de yongs su shes par bya’o // de yongs su shes pa ni rab tu byed pa las ’byung ngo // de bas na yang dag pa’i shes pa mkho bar gyur pa yongs su shes par bya ba’i phyir rab tu byed pa ’di brtsam par bya’o zhes bya’o // de ni re zhig bsdu ba’i don yin no //

それゆえ、文の意味は次である。正しい認識は人間の目的の完成に役立つものであるから、それゆえ、苦労してそれ (正しい認識) を遍知すべきである。それ（正しい認識）を遍知することは論書から生じる。それゆえ役立つものである正しい認識を遍知することのためにこの論書を開始すべきと言われる。それ（上述したこと）はまず、〔NB 1.1〕全体の意味である。

**3.1** samyagjñāna の分析

D 2b5-7; P 3a5-8

yan lag gi don ni yang dag pa’i shes pa sngon du ’gro ba can yin pas na zhes bya ba la ’dir mi slu ba’i shes ba ni yang dag par shes pa ste / gang don byed pa la slu bar mi byed pa yin gyi ma nor ba gang yin pa de ni yang dag pa’i shes pa ma yin no // de lta na ni rab tu byed pa rnal ’byor spyod pa’i lugs sel bar byed par ’gyur te / rab tu byed pa ni mdo sde pa dang / rnal ’byor spyod pa’i lugs kyi

rjes su snyegs par ’jug par ’dod do // de lta bas na gnyi ga’i lugs bsdu ba’i phyir // mi slu ba’i shes pa ni yang dag pa’i shes pa yin par khong du chud par bya’o //

各部分の意味 (∗avayavārtha) を次に述べる。「正しい認識は先行要素である」という中で、ここに「正しい認識」は欺かない (∗avisaṃvādaka) 認識であり、〔すなわち〕目的実現 (∗arthakriyā) に対して欺かないものである。一方、非錯誤的 (∗abhrānta) な〔認識〕は正しい認識ではない。もしこのようにすれば、論書は瑜伽師 (∗yogacāra) の説を否定するものであろう。論書は経量師 (∗sautrāntika) と瑜伽師 (∗yogacāra) の説を伴って行くこと (∗anuvṛtti) を求めるものである。それゆえ、両者の説を受容する (∗saṃgraha) ために欺かない認識は正しい認識であると理解されるべきである。

**3.2** pūrva の分析

D 2b7; 3a1; P 3a8; 3b1

gang la yang dag pa’i shes pa sngon du ’gro ba yin pa ni yang dag pa’i shes pa sngon du ’gro ba can no // sngon gyi sgras ni ’di rgyu yin par brjod de gang gi phyir ’bras bu bas rgyu sva ba de’i phyir de sngon du zhes brjod de yang dag pa’i shes pa’i rgyu can zhes bya ba’i tha tshig go //

あるものに対して、正しい認識は先行要素であるから、〔それは〕正しい認識を先行要素として持つ〔ものである〕(∗pūrvikā)。この「先行」という語は原因を言う。なぜなら、結果より原因が先行する。それゆえ「それが先行する」と言う。それは正しい認識を因としているという意味である。

**3.3** sarvapuruṣārthasiddhi の分析

D 3a1-5; P 3b1-6

skyes bu’i don thams cad ’grub pa zhes bya ba ni skyes bu’i don yin pas na skyes bu’i don to // don zhes bya ba’i sgras ni dgos pa yin par brjod de skyes bu’i dgos pa zhes bya ba’i tha tshig go // de ni thams cad kyang yin pa skyes bu’i don yang yin pas skyes bu’i don thams cad de thams cad ces bya ba ni thag nye ba dang / rgyang ring ba dang / de bzhin du ’jig rten pa dang / ’jig rten las ’das pa dang / de bzhin du dor bar bya ba dang / blang bar bya ba dang; btang snyoms su bya ba’o // de la thag nye ba ni gang yul thag nye ba na yod pa’o // rgyang ring ba ni gang thag ring po na yod pa’o // ’jig rten ba ni gang ’khor ba’i khongs su gtogs pa’o // ’jig rten las ’das pa ni mya ngan las ’das pa zhes bya ba’o // dor bar bya ba ni mi ’dod pa ste sbrul dang / tsher ma dang / dug dang / mtshon cha la sogs pa’i mtshan nyid do // blang bar bya ba ni ’dod pa ste / me tog phreng dang / tsan dan dang / gos dang / bza’ ba dang / btung ba dang / mal cha dang / stan gyi mtshan nyid do // ’dod pa dang mi ’dod pa gnyi ga las bzlog pa gang yin pa de ni btang snyoms su bya ba’o //

「人間のすべての目的の完成」について。人間の目的すなわち人間の目的を意味する (∗puruṣasya arthaḥ puruṣārthaḥ)。目的 (∗artha) という語は目的 (∗prayojana) であることをいう。人間の目的 (∗puruṣaprayojana) という意味である。それはすべてであり、人間の目的であるから「人間のすべての目的」である。(∗sarvaś ca puruṣārthaś ceti)。「すべて」というのは近い (∗nikaṭa)、遠い (∗dūra)、そのよう、世間的 (∗laukika)、出世間的 (∗lokottara)　、また、放棄されるべきもの、獲得されるべきもの (∗upādeya) と無視されるべきもの (∗upekṣaṇīya) である。それらのうち「近い」とは近い場所に存在するものである。「遠い」とは遠い〔場所〕に存在するものである。「世間的」とは輪廻所摂である。「出世間的」とは涅槃 (∗nirvāṇa) のこと〔を言う〕。「放棄されるべきもの」(*heya) とは期待されないもの (∗aniṣṭa) であり、〔例えば〕蛇と棘 (∗kaṇṭaka) と毒

(∗viṣa) と武器 (∗śastra) などの相 (∗lakṣaṇa)〔のものを意味する〕。「獲得されるべきもの」とは期待されるもの (∗niṣṭa) であり、華蔓 (∗mālya) と栴檀 (∗candana) と服 (∗vastra) と食 (∗anna) と飲み物 (∗pāna) と臥具 (∗śayana) と坐具 (∗āsana)〔などの〕相〔のものを意味する〕。期待されるべきものと期待されないものの両者ともに逆なものは「無視されるべきもの」である。

D 3a5-6; P 3b6-7

skyes bu’i don de thams cad kyi rgyu ni yang dag pa’i shes pa yin te / ’di ltar mngon sum la sogs pa’i shes pas dmigs nas mtshon cha dang / dug dang / tsher ma la sogs pa ni yongs su spong ngo // me tog phreng la sogs pa ni len to // de ma yin pa gzhan dag la ni btang snyoms su byed do //

人間のそれらの目的すべての原因は正しい認識であり、すなわち、知覚 (∗pratyakṣa) などの認識によって認識されるから武器と毒と棘などをすべて放棄する。華蔓などを獲得する。それら (獲得されるべきものと放棄されるべきもの) ではなくて、以外のものに対しては無関心である。

D 3a6-7; P 3b7-8

skyes bu’i don thams cad grub pa ni skyes bu’i don thams cad ’grub par byed pa’o // ’grub pa zhes bya ba’i sgra ni ’dir grub par byed pa zhes bya bar brjod do // des ni ’di skad du skyes bu’i don grub par nges pa dang ldan pa gang ci snyed ba de thams cad kyi rgyu ni yang dag pa’i shes pa yin no zhes bstan par ’gyur ro //

「人間のすべての目的を成就すること」は「人間のすべての目的を完成させること」である。この場合では、「成就」(∗siddhi) という語は完成 (∗sādhana) を言う。それゆえ、かくの如くおよそ人間の目的の成就に対して制限を持つもの (∗niyamavat: 必然性を持つ) であり、それはすべて原因であり、正しい認識であるということを示すのである。

### **3.4** iti と tad の分析

D 3a7; 3b1; P 4a1-2

yin pas na zhes bya ba’i sgra ni de’i phyir zhes bya ba’i don yin la gang de ni rtag tu ’brel te / des na ’di skad du gang gi phyir yang dag pa’i shes pa ni skyes bu’i don thams cad ’grub pa’i sngon du btang ba can yin pa de’i phyir de bstan to zhes bya bar bstan par ’gyur ro //

「であるから」(∗iti) という語は「それゆえ」(∗tasmād) という意味であり、yad と tad は常に結びつき、それゆえ、かくの如く「正しい認識は人間のすべての目的の成就することに先立つから、それゆえ、それを教示する」ということを説くというのである。

D 3b1-2; P 4a2-3

de bstan to zhes bya ba la de zhes bya ba ni yang dag pa’i shes pa dang sbyar bar bya ste / ma ning gi rtags kyis bstan pa dang gtso bo yin pa’i phyir ro // ’das ma thag pa yin yang skyes bu’i don thams cad ’grub pa ni ma yin te; dngos su na gcig bo ma yin pa’i phyir ro //

「それを教示する」という中で、「それ」という〔語〕は正しい認識と結びつく。〔なぜなら tad は〕中性名詞として教示され、そして、主題 (∗pradhāna) であるから。〔一方、tad は「人間のすべての目的の成就」という言葉の〕直後にあるとしても、〔tad は〕人間のすべての目的の成就と〔結びつか〕ない。実際には、〔人間のすべての目的の成就はそれだけ（∗eka）ではないから（複数であるから）。

### **3.5** vyutpādyate の分析及び四種類の見解の例示

D 3b2-3; P 4a3-4

yang dag pa’i shes pa de ni log par rtog pa rnam pa bzhi bsal bas nor bar shes bar byed do // log par rtog pa rnam pa bzhi ni grangs la log par rtog pa dang / rang gi ngo bo la log par rtog pa dang /spyod yul la log par rtog pa dang / ’bras bu la log par rtog pa’o //

その正しい認識は、四種類の見解を排除して、それらが錯誤であることを知る。四種類の見解は「数に関する見解」と「svabhāva に関する見解」と「対象に関する見解」と「結果に関する見解」である。

D 3b3-4; P 4a4-6

de la grangs la log par rtog pa ni kha cig gi ni gcig ste / ’di lta ste / phur bu pa rnams kyi lta bu’o // kha cig gi ni gsum ste / ’di lta ste / grangs can pa rnams kyi lta bu’o // rigs pa can rnams kyi ni bzhi’o // spyod pa can rnams kyi ni drug go //

それらのうち、数に関する見解について、あるものたちによって、〔正しい認識の数〕は一つでなる、例えば、唯物論者 (∗bārhaspatya) たちのようである。ある者たちによって〔正しい認識の数〕は三つであり、例えば、数論師 (∗sāṃkhya) たちによってそれは〔三つである〕。正理師 (∗naiyākika) たちによっては〔正しい認識の数〕は四つである。Mīmāṃsaka によっては〔正しい認識の数〕は六つというように。

D 3b4; P 4a6

rang gi ngo bo la log par rtog pa ni ’di lta ste / kha cig ni mngon sum rnam par rtog pa dang bcas pa / kha cig ni rnam par rtog pa med pa lta bu’o //

自性（∗svabhāva）に関する見解は、例えば、ある者たちは知覚を分別と伴うものとする、ある者たちは〔知覚を〕無分別なものとするというようなものである。

D 3b4-5; P 4a6-7

yul la log par rtog pa ni ’di lta ste / kha cig gis ni mngon sum gyi yul ni rang gi mtshan nyid kho na’o // rjes su dpag pa’i yul ni spyi’i mtshan nyid kho na’o zhes brjod la / gzhan dag gis gzhan du brjod pa lta bu’o //

対象に関する見解は、例えば、ある者たちによって、知覚の対象は独自相のみである、推理の対象は共通相のみであると説き、別の者は別のことを説くというようなものである。

D 3b5; P 4a7-8

’bras bu la log par rtog pa ni ’di lta ste / kha cig ni tshad ma las ’bras bu tha dad par khas len la / kha cig ni tha dad pa ma yin par khas len pa lta bu’o //

結果 (∗phala) に関する見解は、例えば、ある者たちは結果は pramāṇa と異なる〔と〕主張し、ある者は〔結果は pramāṇa と〕異ならない〔と〕主張するというようなものである 。

## 参考文献・略号

A: Pāṇini’s *Aṣṭādhyāyī*. See Katre 1989.

D: See NBṬv.

Dhp: Durveka Miśra’s *Dharmottarapradīpa*. See Malvania 1955.

NB: Dharmakīrti’s *Nyāyabindu*. See Malvania 1955.

NBṬD: Dharmottara’s *Nyāyabinduṭīkā*. See Malvania 1955.

NBṬJ: Jinamitra’s *Nyāyabindupiṇḍārtha*, Tibetan tr., Rigs pa’i thigs pa’i don bsdus pa. (Peking ed. No. 5732, [影印版 vol. 137]; Derge ed. No. 4233 [因明部 16 世界聖典刊行協会 1982])

NBṬK: Kamalaśīla’s *Nyāyabindupūrvapakṣasaṃkṣipta*, Tibetan tr., Rigs pa’i thigs pa’i phyogs snga ma mdor bsdus pa. (Peking ed. No. 5731, [影印版 vol. 137]; Derge ed. No.4232 [因明部 16 世界聖典刊行協会 1982])

NBṬv: Vinītadeva's *Nyāyabinduṭīkā*, Tibetan tr., Rigs Paḥi thigs pa ('i) rgya cher ḥgrel pa (P: Peking ed. No. 5729. [影印版, vol. 137]; Derge ed. No. 4230. [『デルゲ版チベット大蔵経』論疏部 因明部 16 世界聖典刊行協会 1982]).

P See NBṬv.

Katre, Sumitra Mangesh
1989 *Aṣṭādhyāyī* of *Pāṇini*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Kimura, Toshihiko (木村 俊彦)
1981 「ダルモーッタラ釈『ニヤーヤ・ビンドゥ』和訳」『ダルマキールティ宗教哲学の原典研究』木耳社

Malvania, Dalsukhbhai
1955 *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa [Being a sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu*]. ed. Dalsukhbhai Malvania, Tibetan Sankskrit Works Series, vol. 11, Kashi prasad jayaswal Research Institute, Patna, 1955. 2nd ed., 1971.

Nakamura, Hajime (中村元)
1981 「インド論理学の理解のために I ダルマキールティ「論理学小論」 (Nyāya-bindu)」『法華文化研究』7: 1–178.

Oki, Kazufumi (沖 和史)
1986 「ダルモーッタラ著『正理一滴論註』第一章の和訳研究 (1)」『哲学』38: 48–66.
2000 「ダルモーッタラ著『正理一滴論註』第一章の和訳研究 (2)」『インドの分析と論理：戸崎宏正博士古稀記念論文集』所収（pp. 347–358）九州大学出版会.

Stcherbatsky, F. Th.
1930 *Buddhist Logic* Volume I & II. Bibliotheca Buddhica 26.

Tosaki, Hiromasa (戸崎宏正)
1984 「Kamalaśīla 作 Nyāyabindupūrvapakṣesaṃkṣipta—現量章のテキストと和訳」『インド古典研究』 VI.

Watanabe, Shoko (渡辺照宏)
1936 「正理一滴論法上釋和譯（一）」『智山学報』9: 95–123.
1936 「正理一滴論法上釋和譯（二）」『智山学報』10: 81–100.
1937 「正理一滴論法上釋和譯（三）」『智山学報』11: 142–166.
1939 「正理一滴論法上釋和譯（四）」『智山学報』13: 129–151.
1970 「調伏天造・正理一滴論解釈和訳」『インド古典研究』 I.

（ぼく　じゅらく、広島大学大学院［インド哲学］）

# On *Nyāyabindu* 1.1: The Difference between Dharmottara's and Vinītadeva's Interpretations

Miao Shoule

Dharmakīrti (ca. 600–660 CE) states at the beginning of the *Nyāyabindu* (NB) that the accomplishment of all the objects of human pursuit is preceded by right knowledge and therefore he lets his students comprehend this knowledge (NB 1.1: *samyagjñānapūrvikā sarvapuruṣārthasiddhir iti tad vyutpādyate //*). The *Nyāyabinduṭīkā* by Dharmottara (ca. 750–810 CE) and the *Nyāyabinduṭīkā* by Vinītadeva (ca. 700 CE), commentaries on the *Nyāyabindu*, develop long arguments concerning its first sentence mentioned above. Their discussion involve various issues, such as: the meaning of the word *sarva*, the difference between the words *pūrva* and *kāraṇa*, the reason why the word *pūrva* is to be stated, the aim of the treatise, and how to comprehend right knowledge (*samyagjñāna*). The explanations given by the two commentators differ in several points.

Some studies have been devoted to NB 1.1; for instance, Oki [1986] and Oki [2000] deal with Dharmottara's and Vinītadeva's works respectively, discussing the subject matter of the *Nyāyabindu*, the aim of this work, and so forth. To the best of my knowledge, however, little scholarly attention has been focused on the difference between the two commentators' reflections on NB 1.1.

The purpose of this paper is to consider this difference and to clarify the causes which have produced it, by investigating Dharmottara's and Vinītadeva's discourses on NB 1.1 in whole.

*The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic* 16 (2019): 143–173.
email: m173482@hiroshima-u.ac.jp